

台湾情報誌

# 交流

2012年7月 vol.856

公益財団法人 交流協会  
Interchange Association, Japan



台湾の研究開発活動の動向と政府の役割

# 交流

2012年7月  
vol. 856

## 目次

## CONTENTS

台湾の研究開発活動の動向と政府の役割 (川上桃子)	1
台北の歴史を歩く その14 台北市東部地域 (片倉佳史)	9
地方自治体と台湾との交流 愛媛県 サイクリングを通じて日台交流	19
情熱とつながりの台湾1周 (安部良)	22
交流協会学生交流事業	33
【台湾内政、日台関係をめぐる動向】 馬英九総統二期目の就任、政府高官の収賄事件 (石原忠浩)	44
コラム:日台交流の現場から 「正伝後藤新平、第三巻台湾時代」を読む	57
編集後記	58

※本誌に掲載されている記事などの内容や意見は、外部原稿を含め、執筆者個人に属し、公益財団法人交流協会の公式意見を示すものではありません。

※本誌は、利用者の判断・責任においてご利用ください。

万が一、本誌に基づく情報で不利益等の問題が生じた場合、公益財団法人交流協会は一切の責任を負いかねますのでご了承ください。

### ● ● 交流協会について ● ●

公益財団法人交流協会は外交関係のない日本と台湾との間で、非政府間の実務関係として維持するために、1972年に設立された法人であり、邦人保護や査証発給関連業務を含め、日台間の人的、経済的、文化的な交流維持発展のために積極的に活動しています。

東京本部の他に台北と高雄に事務所を有し、財源も太宗を国が支え、職員の多くも国等からの出向者が勤めています。



# 台湾の研究開発活動の動向と政府の役割

アジア経済研究所在台北海外調査員

川上 桃子



## はじめに

台湾は長らく、先進工業国が開発した新製品の生産に後から参入し、低コストで機動的な量産の担い手として頭角を表す「追随戦略」「二番手戦略」を通じて急速な産業発展を実現してきた。民間企業による研究開発活動への投資は総じて低調であり、その空白を埋めるように、研究開発活動に占める公的セクターの比率が高いことが、台湾の特徴であると理解されてきた。実際、半導体のウェッファー加工のように、多額の資金と年月を要し、リスクの高い分野への参入に当たっては、政府の強いリーダーシップと技術の導入・拡散の媒体としての工業技術研究院の役割が極めて重要な役割を果たした。

しかし、台湾企業に対するこのような「模倣者・追随者」としてのイメージは、急速に過去のものとなっている。第一に、台湾企業はいまや、半導体や液晶パネル、太陽電池といった最先端の産業で世界の生産の主役に躍り出ている。他方で、多くの台湾企業にとって学習の対象となってきた日本企業のパフォーマンスは停滞気味である。半導体の最先端の加工技術や、IT 機器の製品開発といった面で、台湾企業が世界の製品・技術開発の先頭を走るようになっている。第二にこれと関連して、TSMC や AUO、ホンハイといった大型メーカーが興隆して多額の資金と人員を研究開発活動に投じるようになっている。「台湾の産業は中小企業が多く、研究開発投資には総じて消極的」というイメージはもう過去のものである。第三に、民間部門の研究開発活動の活発化を受けて、政府の役割にも変化がみられる。長らく政府が技術開

発の主役となってきた半導体産業では、1990 年代後半の「ディープサブミクロン」プロジェクトを最後に、政府による大型の技術開発活動は行われていない。また、「産業高度化促進条例」が 2009 年末に廃止され、民間企業の研究開発支出を促す税制面でのインセンティブも縮小された。研究開発活動のパトロンとしての政府の役割は依然として重要ではあるが、その役割はより間接的なものへと変化しつつある。

本稿では、2000 年代以降の台湾経済が、キャッチアップの局面からイノベーションの局面へと徐々に足を踏み入れつつあるという認識のもと、近年の台湾の研究開発活動の現状をデータ整理を通じて検討し、あわせて台湾政府の研究開発支援政策を検討する。以下、I では、データ整理を通じて 2000 年代の台湾の研究開発活動の達成と特徴を検討する。II では、政府によるイノベーション支援策を、主に経済部による「科学技術専案」と国家科学委員会による「国家型科技計画」に焦点をあてて簡単に紹介する。最後に III で議論をまとめたい。

## I 台湾の研究開発活動の達成と特徴

### (1) 国際比較からみた台湾の特徴

まず、データの国際比較を通じて台湾の研究開発活動の近年の変化や特徴をみてみよう。表 1 には、R&D 支出の対 GDP 比を、複数の国・複数の時点について掲げた。2001 年の時点では台湾はここに示した 5 ヶ国のなかで R&D 支出の対 GDP 比率が最も低かったが、最新時点では日本、韓国よりはやや低いものの、ドイツやアメリカを上回る水準となっている。

表1 R&D支出の対GDP比の国際比較

単位：%

	2001年	2005年	2009年*
台湾	2.1	2.3	2.9
韓国	2.4	2.7	3.2
日本	3.1	3.3	3.3
アメリカ	2.4	2.2	2.3
ドイツ	2.4	2.5	2.6

注) \*アメリカは2007年、韓国およびドイツは2008年の数字。

国防セクターによるR&D支出を除外したもの。

出所) 行政院国家科学委員会『科学技術統計要覧』より作成。台湾を除き、原データはMain Science and Technology Indicators, 2011/1, OECD.

また表2には就業者1000人に占める研究人員の数を同じ5ヶ国について掲げた。台湾の数値が2000年の3.4人から2009年には11.6人へと急増しており、国によるデータ年の違いに留意する必要はあるものの、最新時点では表中で最も高い値となっていることが分かる。韓国も同様に2000年代に研究人員数の顕著な増加を経験しており、日本と肩を並べるまでに成長している。このように、台湾のマクロレベルでの研究開発活動の規模は2000年代を通じて拡大し、限られたデータからの比較ではあるが、その強度という点では先発工業国と変わらない(もしくはそれを上回る)レベルに達していることが分かる。

次に研究開発活動の特徴をその担い手という点からみてみよう。表3には研究開発支出の執行主

表2 就業者1000人に占める研究人員数の国際比較

単位：人

	2000年	2009年*
台湾	3.4	11.6
韓国	4.1	10.0
日本	9.8	10.4
アメリカ	10.1	9.5
ドイツ	5.5	7.7

注) \*アメリカは2007年、韓国は2008年の数字。

出所) 『産業技術白皮書』、『科学技術統計要覧』より作成。台湾を除き、原データはMain Science and Technology Indicators, 2011/1, OECD.

体を、企業部門、政府部門、高等教育部門、その他(民間非営利部門)の構成比ごとに示した。1998年の時点では、台湾の特徴は企業部門の比重が小さく、政府のそれが顕著に高いことにあった。しかし、2000年代を通じてこの状況は大きく変わった。企業部門の占める比率が上昇し、政府部門のそれが低下したのである。最新時点のデータをみると、台湾の政府部門の比重は依然として相対的に高いが、その違いはかつてほど顕著なものではない。

R&D支出のパターンという視点からみた台湾の特徴は、産業別に見たときに明らかになる。表4には、民間企業によるR&D支出に占める「ハ

表3 R&D支出の部門別構成の国際比較

単位：%

	1998年				2005年				2009年*			
	企業	高等教育部門	政府部門	民間非営利部門	企業	高等教育部門	政府部門	民間非営利部門	企業	高等教育部門	政府部門	民間非営利部門
台湾	64.2	11.3	23.8	0.7	67.1	11.4	21.1	0.5	70.7	12.2	16.8	0.3
韓国	70.3	11.2	17.5	1.1	76.9	9.9	11.9	1.4	75.4	11.1	12.1	1.4
日本	71.2	14.9	9.3	4.7	76.5	13.4	8.3	1.9	75.8	13.4	9.2	1.6
アメリカ	73.8	11.5	11.5	3.2	69.7	14.1	12.0	4.3	72.6	12.8	10.6	3.9
ドイツ	67.9	17.4	14.7	0.0	69.3	16.9	13.9	0.0	67.5	17.6	14.9	-

注) \*アメリカは2008年の数字。

出所) 『産業技術白皮書』『科学技術統計要覧』より作成。原データ(ただし台湾のデータを除く)はMain Science and Technology Indicators, OECD.

表4 民間企業による R&amp;D 支出の産業部門別構成の国際比較

単位：%

	2005年*			2009年**		
	ハイテク産業	うちコンピュータ、OA機器	AV、電子、通信	ハイテク産業	うちコンピュータ、OA機器	AV、電子、通信
台湾	72	21	47	74	16	53
韓国	53	2	48	52	1	46
日本	38	13	13	36	4	17
アメリカ	40	4	11	58	10	3
ドイツ	31	1	9	23	2	7

注) \*アメリカ、日本は2003年のデータ。

\*\*韓国、アメリカ、ドイツは2008年のデータ。

出所)『産業技術白皮書』各年版より作成。原データ(ただし台湾のデータを除く)は Main Science and Technology Indicators, OECD.

イテック産業部門」(OECDの定義による)の比率を掲げた。ここから台湾の企業セクターによるR&Dが「ハイテク産業」に著しく偏っていることが分かる。それはこの5ヶ国の比較に限ったことではない。『2011 産業技術白皮書』(p.10, 表1-1-8)には欧米の国々を中心に21ヶ国のデータが掲出されているが、台湾のハイテク産業比率の高さは、同じようにこの比率が高いシンガポール(63%)やフィンランド(58%)に比べても群を抜いており、データが掲出されている国の中でも突出した高さである。シンガポールやフィンランド、韓国でも「AV、電子、通信」セクターが民間企業のR&D支出の半分を占める重要なセクターとなっているが、台湾の場合にはこのセクターと、コンピュータ・OA機器セクターがともに重要な研究開発活動の担い手となっているのが特徴的である。1990年代の台湾経済の大黒柱であり、2000年代以降は生産の場を中国に移しつつさらなる拡大を遂げたパソコン産業のような最終製品セクター、2000年代の台湾経済の大黒柱となった「両兆産業」——すなわち半導体産業、液晶パネル産業のような電子部品——、スマートフォンのような新興のハードウェア製造セクターの存在が、国際的にみても遜色のない台湾のR&D活動のパフォーマンスを支えているものと考えられる。

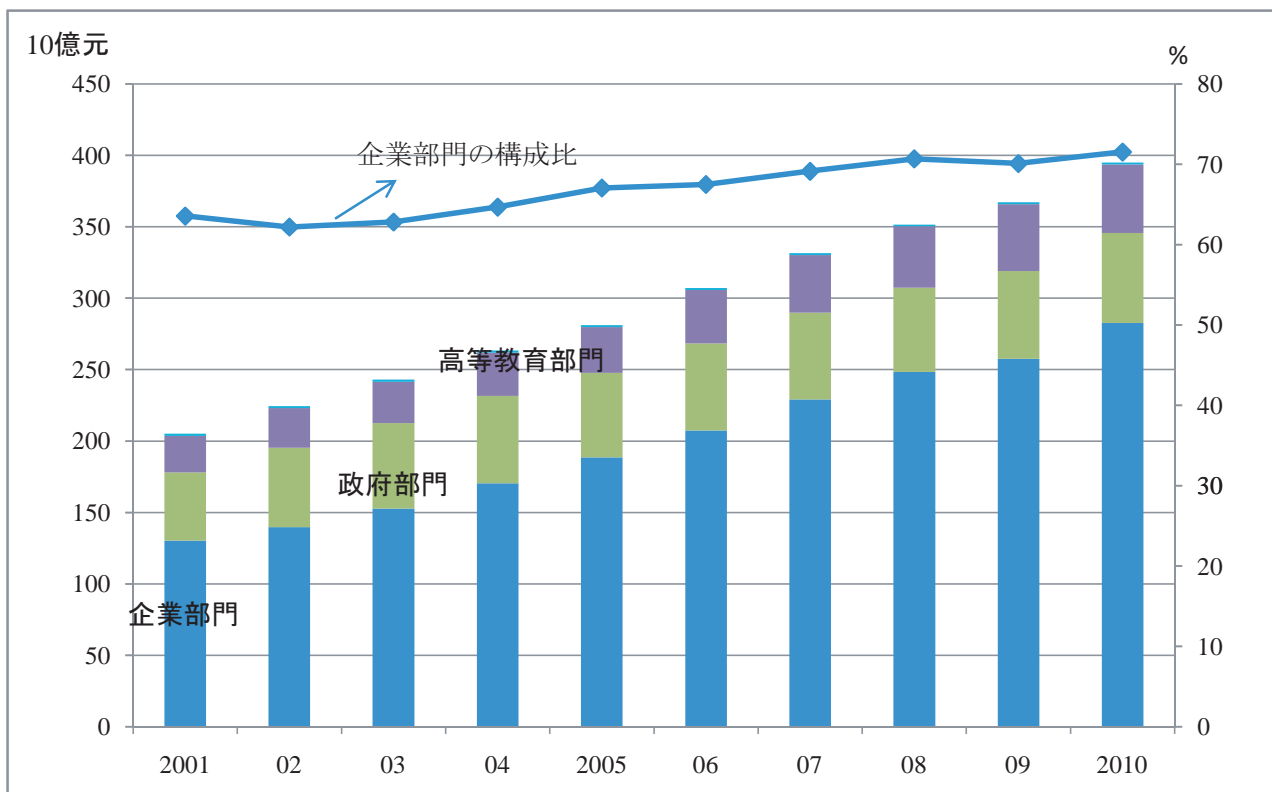
2000年代の台湾経済は、輸出、製造業付加価値生産、製造業の雇用といったいずれの指標で見てもエレクトロニクス産業への傾斜を急速に深めている(川上[2010])。ここでみたデータからは、研究開発支出の産業別構成という点でもまたエレクトロニクス産業の比重が突出したものとなっていることが分かる。

## (2) 2000年代の変化

このように国際比較の視点からは、研究開発の対GDP比や民間企業の占める比率といった点で、台湾が日本やアメリカ、ドイツといった先発工業国に近い構造を持つようになってきていること、また政府部門の主導的な役割が過去10年の間に変化してきたことが分かった。ここで、台湾のデータに絞って過去10年の動きをみてみよう。

図1にはR&D支出の部門(企業、政府、高等教育の各部門)別の金額の推移と、このなかで企業部門が占める比率の推移を示した。企業、政府、高等教育セクターの支出はいずれも2000年代を通じて拡大している。2001年と2010年を比べると、政府部門の支出額は480億元から630億元へと増加したが、それにもまして急拡大を遂げたのが、2001年の1300億元から2010年の2830億元へと拡大した企業部門のR&D支出であった。その結果、企業部門の構成比は2001年の64%から

図1. R&D支出の部門別構成と企業部門の構成比の推移



出所) 行政院国家科学委员会『科学技術統計要覧』より作成。

2010年には72%にまで上昇している。

図2には研究開発活動に従事するマンパワーの数の変化をみた。①研究人員数<sup>1</sup>と、②研究活動に従事している時間の比率を調整した研究人員数(FTE:例えば研究員1名が、一年の就業時間のうち6割を研究活動に、4割を教育活動にあてたならこの研究員は0.6FTE(full time equivalent)とカウントされる)を掲げたが、いずれでもわずか10年の間にほぼ倍増したことが分かる。

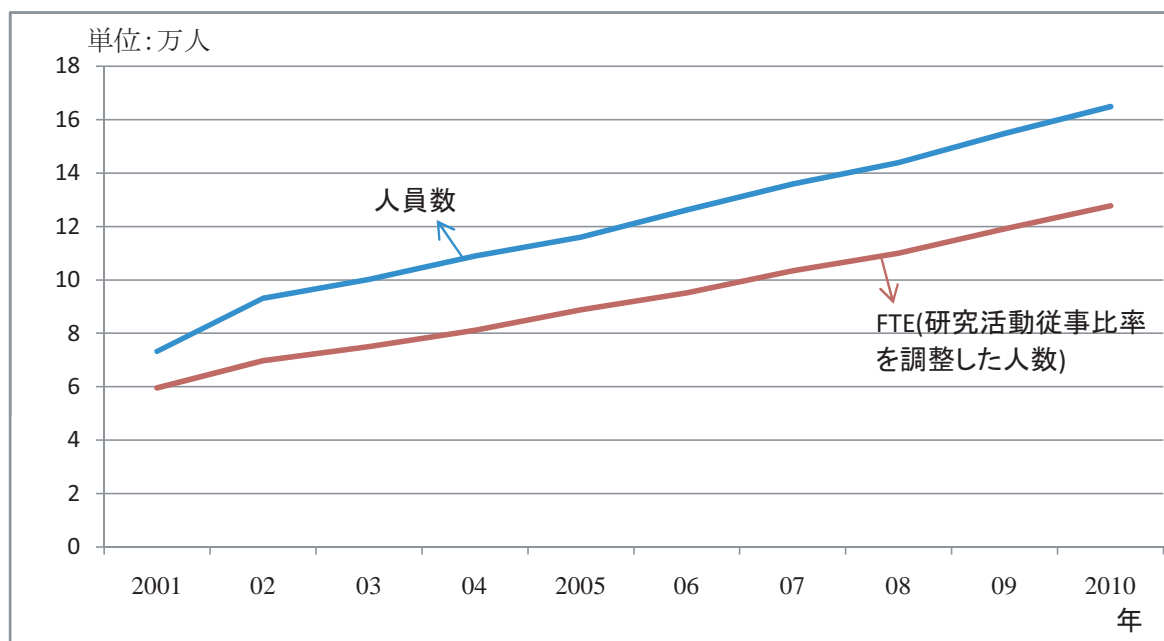
このようなめざましい研究開発活動の拡大の背後には、エレクトロニクス産業のR&D活動の活発化がある。2010年の企業部門の研究人員のFTEは80,532人・年であったが、実にこのうち55,162FTEがPC、電子、オプトエレクトロニクス産業に属していた。(1)でみた支出面だけでなく、人員増という指標からみても、台湾の研究開発活動の拡大を牽引してきたのがエレクトロニクス産業であることが分かる。

## II 政府による研究開発支援策

以上でみてきたように、台湾の企業部門の研究開発活動は、2000年代を通じて急速に拡大してきた。そしてその牽引車となってきたのはエレクトロニクス産業であった。それでは、このような変化のなかで政府の研究開発支援策はどのように変化してきたのであろうか。またその政策ツールや、特徴は何であろうか。

台湾の科学技術政策、イノベーション政策に関する政府部門は多岐にわたっており、政策の全体像をつかむのは難しい。また政策に関するプレスリリースや政府発表の資料は多数あるが、概して総花的な印象で、ポイントがつかみにくい。そこで以下では、政府資料を参照して近年の産業政策の重点領域をみたのち、筆者が行った政府の関係部門と研究者へのインタビュー結果を参考にしつつ、主に経済部の「科技プログラム」と国家科

図2 研究人員の数の推移



出所) 行政院国家科学委員会『科学技術統計要覧』より作成。

学委員会の「国家科学技術プログラム」に焦点をあてて、政府の役割について簡単に考察することにしたい。

### (1) 政府による重点育成領域

台湾政府の産業政策の重点対象には、「六大新興産業」「四大新興智慧型産業」等、複数のプランがある。前者の「六大新興産業」は、台湾の産業構造がエレクトロニクス産業に集中している現状に鑑みて、より多角的な産業発展をめざすものであり、バイオテクノロジー、観光旅行業、グリーンエネルギー、医療介護、ハイエンド型農業、文化・創造から成る。グリーンエネルギーを除き、総じて生活密着型のニッチ産業や萌芽的段階にある非製造業型の産業である。他方、後者の「四大新興智慧型産業」は台湾のエレクトロニクス産業の競争力を活用し、さらに高めることを目的とするもので、クラウド・コンピューティング、電気自動車、発明・特許の産業化、スマートグリーン建築の4つから成る。

大まかにいえば、「六大新興産業」がエレクトロニクス産業への偏重の是正と多角的な経済発展の

方向性を模索するものであり、「四大新興智慧型産業」は台湾経済の大黒柱であるエレクトロニクス産業の活用形態の多元化、高度化をめざすものであるといえよう。共通して、1990年代後半以降に急速に進んだ産業構造の一極集中化、すなわち電子ハードウェア製造業への特化への問題意識を踏まえた政策であることがみてとれる。

### (2) 産業高度化奨励条例の廃止の影響

科学技術政策には様々な政策ツールがあるが、そのなかでも台湾においてごく最近まで重要な役割を果たしてきたと考えられるのが、「産業高度化促進条例(促進産業升級條例)」であった。この条例は、「投資奨励条例(奨励投資條例)」に代わって1991年から施行されたもので、設備投資への免税・減税措置を通じて半導体や液晶パネルのような設備集約型産業の投資競争力を高めたことで知られているが(立本[2008])、ハイテク産業の研究開発投資に対しても促進効果を持った。

同条例の第6条およびその細則では、企業のR&D投資および人材育成投資の35%までを限度として税額控除の対象とすることが可能であっ

た。2004～2007年の平均をみると、同条例による税額免除額のうち、研究開発に関わるものの比率は18%であった(呉[2009])。しかし、同条例については、「戦略的に重要な新興産業」への適用に限られた項目があることから、高い競争力と収益力を誇るハイテク産業がより重点的に減免税を受けていることへの批判が強く、2009年末をもって同条例は廃止された。

その後、R&D支出については、2010年に公布、施行された「産業創新条例」の第10条によって、引き続き税金の減免措置が受けられることになっているが、その優遇措置は相当程度、縮小されている。控除の上限がR&D支出の15%に引き下げられたうえ、年度を越えての控除は認められなくなった。また控除対象となる支出項目が縮小され、審査のプロセスも従来より厳格になった。租税面での優遇策を通じたR&D投資奨励策は大きく縮小されたといっているであろう。

筆者がインタビューを行った専門家らは、このような政策環境の変化のなかで、經濟部技術処主管の「科技プログラム」の政策ツールとしての重要性が相対的に増していると指摘した。そこで次にこれを見てみたい。

### (3) 科技プログラムの概要と役割

「科学技術研究開発プログラム(科技研究發展專案計画、略称「科技專案」)」は、科学技術發展方案の制定を受けて1979年に開始された。最初に導入されたのは、工業技術研究院や資訊工業策進会といった財団法人形式の研究機関に、先端的な技術やコア技術、コア部品の開発を委託し、その成果を広く産業界に移転・拡散していく枠組みである。これは、財団法人が実施することから「法人科技プログラム」と呼ばれている。次いで1997年からは、民間企業が政府の資金を用いて技術開発を行う「業界科技プログラム」制度が導入された。初期には企業による先端的・汎用的な技術の開発を支援するプログラムが推進され、2006年か

らは、政府が選定した優先プログラムの実施企業を募るといった方式も導入されている。そのほか中小企業によるイノベーションを支援するプロジェクトや、地方政府と提携して地域の特色ある技術開発、産業クラスターレベルのイノベーションを促進する仕組み等ももうけられている。さらに2001年からは大学を担い手とする「学界科技プログラム」も導入されている。

以上でみた①法人科技プログラム、②業界科技プログラム、③学界科技プログラムが科技プログラムの3本柱であるが、その中心は現在にいたるまで、法人科技プログラムである。2010年の科技プログラムの報告書(「經濟部技術處「2010科技專案執行年報」)からこの点を見ていこう。2010年の法人科技プログラムの経費は約149億元であり、科技プログラム全体の75%を占めた。分野別には、バイオ・医学材料・化学領域が19%、電子・情報・通信・光学領域が17%、機械・電機・輸送機械領域が16%を占める。実施機関別では、工業技術研究院のプレゼンスが高く、2010年の法人科技プログラム決算額149億元のうち約90億元が同研究院によるものであった。金[2002]が指摘したように、台湾のイノベーションシステムの特徴はこの巨大な公的研究開発機関の存在にある。

「業界科技プログラム」の1999-2010年の累積実施件数は、459プロジェクトであった。個別企業によるプロジェクトのほか、産業協会と複数の企業が共同で行った研究開発プロジェクトもある。また「学界科技プログラム」の2002-2010年の累積実施件数は97プロジェクトであった。

「2010科技專案執行年報」では、法人・業界・学界を総合した全体での領域別支出構成のデータが入手できないため、科技プログラムの全体像をつかむには十分ではないが、全体の四分之三を占める法人科技プログラムから見る限り、科技プログラムの分野別支出構成は台湾全体で見たときの状況とは異なり、電子産業に偏ったものではなく、



むしろバイオ・医学材料・化学といった基礎的領域や、機械・電機・輸送機械といった台湾の製造業基盤にとって重要であり、一定の競争力を持つセクターでありながら、企業レベルでの研究開発には資金面・資源面での制約があると思われるセクターの比重が相対的に高いものとなっている。これは、民間部門の研究開発活動がエレクトロニクス産業に傾斜するなかで、政府がそれ以外のセクターの技術開発のパトロンの役割を果たそうとしていることを反映しているものと考えられる<sup>2</sup>。

#### (4) 国家科学技術プログラム

台湾の国家科学技術プログラム（国家型科技計画）は1998年にスタートした。プロジェクトは4-5年を1期とし、数期にわたって実施されるものが多い。

2012年の時点で実施されているプロジェクトとしては、ネットワーク通信、ナノテクノロジー、デジタルアーカイブ・デジタル教育、エネルギー、バイオテクノロジー・医薬、スマートエレクトロニクス等がある。現在、予算規模の面で最大のプロジェクトはナノテクノロジーであるが（『中華民国科学技術白皮書（民國100年至103年）』インターネット版）、産業面での波及効果という面でもより期待できるのは、ネットワーク通信のような台湾内で産業基盤が確立しつつあるものだろう。

詳細な調査は今後の課題であるが、台湾の同プログラムの特徴は、大学セクターへの資金配分の比重が高く、学術研究的な性格が強いことにあるものと見られる。ネットワーク通信プロジェクトにおける中華電信や、エネルギープロジェクトにおける台湾電力のように、技術のユーザーとして参加するケースはあるものの、民間企業のプログラムへの参加は概して低調であるという（2011年11月の国家科学委員会でのヒアリングによる）。これは、企業の側に、同プログラムが目標とするような長期的な研究開発への参加意欲が低いためであるという。

他方で、科学技術プログラムの実施は、人材育成といった間接的な効果を通じて、産業界の競争力上昇に寄与してきたものと見られる。例えば、LSIプログラムを通じた大学部門への資金投入は、台湾のLSI設計の人材育成に大きく貢献してきた。大学では、LSI設計教育にあたる教員の数が大幅に拡充され、台湾では手薄であった無線技術、アナログ技術等を専門とする優秀な教員が増員された。その結果、台湾では毎年数千人のLSI設計者が大学から業界へ輩出されるようになっていくという（堀切[2005]）。

### III まとめ

本稿では、主に2000年代に入ってからの変化に注目しながら、台湾の研究開発活動の特徴とそのなかでの政府の役割を見てきた。かつての台湾では、中小企業主体の産業構造を反映して、企業部門による研究開発活動は総じて低調であり、R&D支出に占める政府の役割が高かった。だがこの10年ほどの間に、エレクトロニクス産業が急激に拡大し、先進国の追随者として急成長を遂げたのみならず、多くのキーパーツ、製品の生産でトップランナーへと発展した。これに従い、エレクトロニクス産業での活発なR&D活動とその急激な拡大が牽引役となって、台湾の企業セクターによる研究開発支出は急速に拡大した。政府は財政制約が厳しくなる中でも2000年代を通じてR&D支出を積極的に拡大してきたが、それにもまして民間企業の研究開発活動が活発となった結果、近年では、研究開発の強度、企業部門が占める比率といった点で、台湾は先発工業国とよく似た構造を持つようになっていく。さらにいくつかの指標ではこれらの国々を凌駕する活発なR&D支出を行うようになっていく。同時に台湾の研究開発活動は、その付加価値生産、輸出、雇用構造と同様に、エレクトロニクス産業に偏重した構造を持つにいたっている。

このような趨勢のなかで、政府は、エレクトロニクス産業以外のセクターでの研究開発のパトロンないしその担い手として、補完的な役割を果たしているものと考えられる。設備集約型のハイテク産業に対して育成効果を有した「産業高度化促進条例」の廃止後、政府の科学技術政策のツールとしての科技プロジェクトの重要性は高まっているとみられるが、その支出の中身をみると、基礎的領域の技術開発や、機械・電機・輸送機械といった台湾が一定の競争力を持つ分野であり、エレクトロニクス産業に比べると成長速度の緩やかなセクターへの支援に力を入れようとする意図がみてとれる。これは、近年、台湾政府の産業政策の重点が産業発展の多元化に置かれていることと密接に関連しているものと考えられる。

もっか、台湾では政府組織の改革が進められており、国家科学委員会は2013年より「科技部」に改組される予定となっている。また、立法面では、科学技術基本法の改定により、研究開発支出に関する政府調達ルールの適用弾力化や政府資金を用いた研究成果の知的財産の活用方法の柔軟化を図ろうとする動きもある（葉整理[2011]）。このような組織、制度面での改革が、台湾の科学技術政策をどのように変えていくのか、注目される。

### 【参考文献】

中国語

科技政策研究與資訊中心 [編印]、国家実験研究院 [発行] 『中華民国科学技術年鑑』 各年版。

行政院国家科学委員会 [編印] 『科学技術統計要覽』 各年版。

行政院國家科学委員會 『中華民國科學技術白皮書 (民國 100 年至 103 年)』、ダウンロードにより入手。

(財)台湾經濟研究院 [編輯]、經濟部技術處 [出版] 『産業技術白皮書』 各年版。

吳郁萱 [2009] 「研究發展支出適用投資抵減之研析」 (受託單位) 行政院經建會部門計劃處。行政院經濟建設委員會ホームページよりダウンロード。

葉芳庭整理、宋餘俠・沈建中・郭勝峯採訪「專訪行政院朱政務委員敬一 我國政府研發創新之投入與應用」 『研考雙月刊』 35 卷第 5 期 2011 年 No.285。

日本語

川上桃子 [2010] 「電子産業への傾斜を深める台湾の産業構造」 『交流』 832 号、2010 年 pp.10-18。

金甲秀 [2002] 「台湾と韓国におけるイノベーション・モデルのアーキテクチャ」 永野周志編著 『台湾における技術革新の構造』 九州大学出版会。

立本博文 [2008] 「制度による技術伝播の促進—1990 年代の半導体産業の事例—」 東京大学ものづくり経営研究センター MMRC discussion paper series Mp.235。

堀切近史 「LSI 開発拠点に変貌する台湾 技術者の育成に総力を結集」 日経エレクトロニクス 2005 年 12 月 5 日号。

<sup>1</sup> ここで研究員とは「新たな知識、新製品、新たな生産工程、新たな方法および新たなシステムの構想および創出に従事する専門的な人員およびこれに関連するプロジェクトの専門管理者」を指す（『科学技術統計要覽』）。

<sup>2</sup> なお、企業が科技プロジェクトを用いて開発した技術の成果の海外展開は、一定年限、禁止されるのが一般的であるという。政府資金を用いての開発成果であり、新規性の高い技術であるから、一定期間は台湾内で活用して付加価値創出、雇用の対外流出を食い止めたいという趣旨からの規定であると思われるが、エレクトロニクスメーカーのように開発・生産のグローバル化が高度に進んだセクターの企業にとってはこの規定が科技プロジェクトを利用するうえでの制約になっているとの指摘もある。

## 台北市東部地域

片倉 佳史

台湾の首位都市として君臨する台北市。人口は260万をほこっており、名実ともに台湾の中枢となっている都市である。その台北の歴史をたどる旅。今回は中正紀念堂を中心に台北市東部の歴史を辿ってみたい。

### 国立台湾大学医学院附設医院旧館

今回は前回紙幅の関係から紹介できなかった旧台湾総督府台北医院を最初に取り上げてみたい。ここは台湾最大の病院建築であると同時に、最大の医療研究機関でもあった。台湾の医療史を語る上で、欠かせない存在の建物である。

この建物は中山南路の西側に面している。正面玄関は常德街という路地に面しているが、中山南路を走っていると、赤煉瓦の重厚な建物が延々と続いている。現在は中山南路の東側に国立台湾大学医学院の付属医院が竣工しており、こちらは旧館という扱いになっている。

この建物の竣工は1916(大正5)年。1919年に竣工した台湾総督府とほぼ同時期の建築物である。赤煉瓦造りのどっしりとした建物で、台湾総督府や専売局と並び、台北を代表する建築として広く名を馳せていた。1921年には伝染病棟が完成している。総敷地面積は2万3900坪。建坪1万7200坪という規模を誇っていた。

台北には赤煉瓦の官庁建築がいくつか残っているが、いずれも南国の強い日射しを受け、輝いているように見える。そして、ビンロウ樹や大王椰子といった熱帯性植物は日本本土では見られず、建築士たちも、南国の植物を建物に重ね合わせることに熱心だったのではないかと思えてくる。

建物の前に立ってみると、赤煉瓦の外壁に白石を帯状に配したデザインが美しい。これはこれまでも何度か述べてきた「辰野式」のスタイルで、

この時代の台湾によく見られたものである。

設計を担当したのは台湾総督府技師の近藤十郎だった。近藤は東京帝国大学建築学科を卒業後、1906年に台湾へ渡ってきた技師である。この建物以外にも西門町の八角堂(現西門紅樓)や台湾日日新報社(現存せず)、基隆郵便局(現存せず)、台北第一中学校(現建国中学)などを手がけているが、ここは彼の代表作とされることが少なくない。1920年には台湾総督府の営繕課長となり、私立成淵学校の校長を兼任したが、1924年に官職を辞し、東京へ戻っている。



現在は国立台湾大学医学院附設医院を名乗っている。当初は木造建築だったが、1913年に改築工事が始まった。1936年に台北帝国大学の付属病院となった。

### 東洋随一の規模を誇った病院建築

正面玄関を入ると、大ホールがあった。当初は右手に事務室があり、左手に薬局があった。このホールは大ききこそ、それほどではないが、やは

り圧倒されるものがある。二階部には回廊があり、ここにも立ち入ることができる。

1937（昭和12）年の資料によると、台湾総督府台北医院には内科、外科、眼科、小児科、産婦人科、耳鼻科、皮膚科、歯科、理学治療科があった。病床は一等、二等、三等に分かれており、それぞれ、25、50、308となっており、合計383となっていた。一等病室の定員は1名で、二等は2名だった。三等は不定（通常時は4名）とされていたが、収容人数を確保するために大部屋が設けられ、定員は6～8名、最大で18のベッドが置かれることもあったようである。

この病院は設備、スタッフともに高いレベルを誇り、それは東洋随一とも称されていた。実際に館内を歩いてみると、思いのほか広い。建物の配置は独特なもので、中央通路を背骨に喩えると、病棟が左右対称に肋骨のように並んでいる。竣工時は動物の骨格を模しているようだと評されたという。

この配置は風通しと日当たりをよくするための工夫であるという。建物は東西にのびており、各棟病室の南面にはベランダが設けられていた。さらに、基礎土台は1メートルほど高くなっている。つまり、建物全体が中二階のような状態になっており、正面玄関も一度、石段を上った場所にある。これもまた、湿度を嫌ったためのものである。



台湾最大の規模を誇った病院建築。「一度に500人分の食膳を用意できる」といううたい文句が存在する大型病院だった。中央ホールの様子。

## 熱帯病理学の権威

ここは病院としての機能だけでなく、研究機関としても知られていた。特に熱帯病理学については世界的な権威となっていた。1874年の台湾出兵（牡丹社事件）によって、日本人は初めて熱帯病の恐ろしさを知り、1895年に台湾を領有した当初も澎湖島に派遣された部隊がマラリアの大発生に苦しめられるなど、大きな痛手を被っていた。

日本統治時代が始まった後も、衛生状態は極度に悪く、上下水道設備もなく、人々の衛生意識も完全に欠如していた。そういった中、この地の風土に慣れない日本人は抵抗力がないこともあり、あらゆる病魔に苦しめられた。

そういった背景もあり、台湾総督府はマラリアやコレラといった疫病の対策に全力をあげた。そして、この建物は医療研究の中核と位置付けられていた。

1898（明治31）年に台湾総督府民生局長（後に民政長官と改名）に着任した後藤新平は、自身が医師であり、内務省衛生局長を歴任していたが、そういった手腕を発揮することが期待されていたのは言うまでもあるまい。

後藤はまず「公医」の制度を採用した。これは新設された医学校の卒業生が実地で活躍し、衛生事情が安定するまでの期間、本土から医師を呼び寄せるものだった。そして、人々に衛生意識を植えつけ、同時に医療技術者の養成を進めた。

そして、1899（明治32）年には医学校が設立される。ここは医師養成を主軸に起きながらも、同時に風土病の防疫を中心とした医学研究の場であった。その後、日本統治時代は敗戦によって終わりを告げたが、戦後を迎えた後もここは熱帯病理学の権威として君臨し続けた。

戦後は国立台湾大学の附属病院となり、1991年に中山南路を挟んだ場所に新館が完成したことで、主役の地位はこちらに譲っている。しかし、

この建物の風格は今も全く色褪せていない。台湾医学界の重鎮として、存在感を見せつけている。内部の参観も自由にできるので、ぜひ一度は訪れたい場所である。



赤煉瓦の壁面。ここは現在も台湾で指折りの規模を誇る病院である。随所に増築と改修の跡が見えるが、ほぼ往年の姿を留めている。MRT（新交通システム）の駅に近く、交通はとても便利だ。

## 中国北方式のスタイルに変えられた東門

総統府（旧台湾総督府）の前をのびる凱達格蘭大道を進んでいくと、突き当たりに旧台北城の城門である東門があり、そこから北側に仁愛路、南側に信義路がのびている。その付け根の部分にはエバーグリーン（長栄）グループが運営する張榮發基金會のビルがある。

会議場や海事博物館なども併設されているこの建物だが、もともとは中国国民党の中央党部（本部）があった。2006年3月に張榮發基金會が23億円で購入し、話題となった。日本統治時代には日本赤十字会の庁舎があった場所である。

東門についても触れておきたい。これまでも触れてきたように、清国統治時代の台北は周囲を城壁に囲まれていた。そして、東西南北に小南門を加えた計五箇所の城門があった。

東門は正式には景福門を名乗り、1879年に創建されたが、日本統治時代に都市計画によって城壁は撤去された。そして、戦後を迎え、中華民国政府は「観光整備」という名目の下、この城門に改築を施した。1966年にこの工事は終わったが、原

型は保たれず、中国北方の宮殿様式のものとなってしまい、上部には国民党の党徽が据え付けられてしまった。

こういった歴史建築の私物化というケースは戦後の台湾では全島にわたって見られた。この党徽については、1982年、当時は台北市議会議員だった陳水扁らによって指摘された。そして、それから20年もの歳月を経て、2009年6月12日、「歴史的建造物は本来あるべき元来の姿を基準とする」という台北市文化局の決定により、ようやく党徽は消された。

日本統治時代に発行された古絵はがきを見ると、当初の東門は二層となっており、屋根は中国南方のスタイルである曲線を多用したものだ。そして、戦闘に備え、分厚い石組みとなっているほか、随所に銃眼が施されていた。大きさは34坪程度のものだった。

余談ながら、こういった南方式、北方式の宮殿様式の建造物を見ていると、戦後に台湾へやってきた外省人勢力の「特権ぶり」を感じることができる。台湾各地で見られる古刹・名刹の類はほぼ例外なく南方式だが、戦後に創建された故宫博物院や国父紀念館、圓山大飯店、そして、台南の延平郡王祠などのように、戦後に改築を受けたものは圧倒的に北方式が多い。



総統府に向かい合う位置にある東門。台北という都市の歩みを自らに刻み込んだ歴史の証人である。張榮發基金會のビルから総統府方面を眺めた様子。

## 蒋介石の偉業を称える中正紀念堂

台北市の中心部に位置するこの空間は、台湾が歩んできた道のりと台湾社会が抱く現状を如実に物語る場所である。

日本統治時代の地図を見ると、この辺りは旭町と呼ばれていた。終戦まで、ここには日本軍の山砲隊と歩兵第一連隊があった。言うまでもなく、市内最大の規模を誇っていた軍用地だが、終戦後、国民党に接収されて党財産となり、その場所に中正紀念堂が建てられた。

現在、敷地全体は中正公園と呼ばれ、その敷地面積は8万2600坪となっている。その奥にあるのが蒋介石を記念した中正紀念堂である。青い屋根と白い壁が印象的な建物で、広大な広場を従えているためか、その存在感は大きい。

「中正」とは正門にも記された「大中至正」に由来する蒋介石の本名である。ここは1975年に死去した蒋介石の「偉業」をたたえる名目で造営され、1976年10月31日、蒋介石の誕生日に合わせて工事が始まった。そして、1980年4月4日に全工事が終了。翌日から一般公開となった。

台湾における孫文と蒋介石の存在について、触れておきたい。まず、孫文は国民党政府によって中華民国の国父として神格化された人物である。しかし、孫文の生涯は台湾との接点が多かったわけではない。そのため、中華民国に思い入れのある外省人はともかく、本省人と呼ばれる台湾土着の人々が孫文に対して抱くイメージというのは往々にして薄い。戦後、国民党政府によって敷かれた教育体制の下、国父として孫文を崇めることを強要されたが、印象としては、ある程度の距離感があるように思える。実際、孫文の名を知らない台湾人はいないが、その人物像や生涯について、深い知識を持つ人は多くない。

一方、蒋介石については、戒嚴令の時代を知る世代であれば、省籍を問わず、無縁でいることは

できなかった。恐怖政治を敷いて、社会を制してきた人物だけに、人々が抱く印象は複雑と言わざるを得ない。ここでは詳述しないが、台湾の戦後史を知る上で、避けては通れない命題であることは確かだ。



台北市内の中心部に広大な敷地を誇る中正紀念堂。蒋介石の偉業を称える名目で設けられた。現在は中国人旅行者が激増している。

## 外省人、そして中国人と中正紀念堂

周知のように、蒋介石率いる国民党政府は共産党との闘いに敗れ、政府機能を台湾に移してきた。そして、国際社会において、中華人民共和国政府が中国の代表政府となった後も、中華民国は台湾に亡命した状態で国体を維持してきた。外省人、特に第一世代の人々の意識は今も「中国人」であり、故郷である中国大陆に戻る夢を捨てていない。当然、台湾という土地に対しての思い入れは深くない。

しかし、時代とともに、「大陸反攻」の夢が現実性を失っていったのは明白で、そのために政府は国家に忠実な人材を育て上げる必要があった。つまり、台湾の人々に「中国（＝中華民国）」意識を植え付け、政府の主張に見合った国民に仕立て上げるべく教育を施したのである。そして、諸外国に対しても、「中華民国」という実体を視覚的にアピールする必要があった。ここ中正紀念堂は、そういった思惑が結実した現場だった。

その後も中正紀念堂を取り囲む環境は大きく変

化した。特に李登輝総統の時代に急速に進められた民主化により、独裁者と特定政党への忠誠を示す空間は、年々浮いた存在となっていった。実際に、中正紀念堂は中華民国への独善的愛国主義者と外省人第一世代の精神的支柱であるという批判は公然と出されていた。

もともと、中正紀念堂は市内最大の公共空間であり、各種イベントが実施されることが多かった。しかし、戒厳令が解除されると、学生運動やストライキの集会が開かれるようになり、特に民主進歩党が政権を担った2000年から2008年の間は、それまで国民党政府が弾圧を加えてきた台湾独立・建国派の集会までもが行なわれるようになった。

名称についても問いかけが行なわれた。独裁者の名称を冠した呼称は民主国家にふさわしくないとして、「台湾民主紀念堂」や「総統紀念堂」といった名に改めようという意見が出された。これについては2007年に一度、「台湾民主紀念館」と改名されたものの、強大な勢力を誇る旧政権の反対に遭い、また、各選挙で民進党が連敗していたこともあって、2009年7月20日に中正紀念堂の名が復活するという一幕があった。

そして、2008年7月18日、中国人観光客の受け入れが解禁されたことで、中正紀念堂はさらに新たな局面を迎えた。蒋介石を記念して設けられたこの空間は、中国からの観光客で溢れかえるようになったのである。もちろん、その真意は畏敬や尊敬、支持といったものとは全く無縁であり、あくまでも観光スポットとして扱われているが、あふれかえる中国人旅行者の姿と、蒋介石や国民党の党徽などをモチーフにしたグッズが飛ぶように売られている様子を見ていると、隔世の感は否めない。変わりゆく時代の中、中正紀念堂の存在は常に微妙な動きを見せている。

## 曹洞宗大本山台北別院鐘樓

先述した東門から仁愛路を進んでいくと、林森

南路との交差点にちょっとした広場がある。オフィスビルの前庭のような場所だが、そこに古めかしい鐘樓が残っている。日本統治時代に曹洞宗の布教所として設けられた寺院の跡地である。

1895(明治28)年、台湾は日本の統治下に入ったが、間もなくして、日本の仏教団体は各宗派とも、熱心な布教活動を開始している。ここもそういった中の一つで、正式名称は曹洞宗大本山台北別院を名乗った。寺院の設立は1908(明治41)年、翌々年の5月28日に入仏式が挙行されている。

比較的早期に設けられたこともあって、曹洞宗の信徒は多かったという。1923年に寺院は改築され、1930年には台湾人信徒のために、後述する観音禪堂が設けられた。設計は入江善太郎という人物が担った。入江は東京工業学校教員養成所を出て1904(明治37)年に台北庁技師となり、1912年に台湾総督府の技師となっている。本堂の完成を見ることなく入江は台湾を去り、明治神宮の囑託技師となり、さらに後、朝鮮へ渡っている。

なお、この寺院は学校も経営していた。1916年に寺院付属の学校が設けられ、僧侶や信徒の子弟への宗教教育が行なわれた。これは1935年に「私立台北中学校」と改名され、一般の教育機関となった。この学校は通称「ほんちゅう梵中」と呼ばれて親しまれていた。現在、この学校は台北郊外の士林に移転しているが、私立泰北中学として残っている。

終戦を迎えると、寺院は変容を強いられた。日本人は台湾を去り、寺院は国民党政府によって東和禪寺と名付けられた。しかし、敷地は中国大陸からやってきた下級兵士や貧民に占拠され、無秩序な状態が続くこととなる、本堂は戦後もしばらくは残っていたが、火災によって焼失。現在、その場所には台北市政府(市役所)教育部の青少年センターが建っており、かつての様子を偲ぶことはできない。

そんな中、かろうじて往年の姿を留めているのがこの鐘樓である。1930年に竣工したもので、近

寄ってみると、石組みの基礎部分は堅固な造りである。鐘楼が正門となっているという構造は珍しく、下部が石造りで、上部がコンクリート造りという構造についても特筆されていた。

現在、周囲は高層ビルが林立し、渋滞が慢性化した幹線道路からは絶えることなく自動車の走行音が聞こえてくる。現在、台北市はこの鐘楼をモニュメントの扱いにして、周囲を整備している。古蹟にも指定され、行政によって管理されることが決まっている。一度はうち捨てられ、放置されていた鐘楼だが、今や再び息を吹き返したかのようである。



基座は石組みで堅固な造りとなっている。周囲には真新しい日本式の石灯籠が並べられている。



鐘楼全景。鐘楼が山門を兼ねるという設計は珍しかったという。なお、隣接する泰北中学は日本統治時代からの仏教系私立学校で、この寺院が運営する教育機関であった。



林森南路と仁愛路の交差点に位置している。現在、寺院の痕跡を示しているのはこの鐘楼以外には残っていない。

## 寺院の伝統を受け継ぐ観音禅堂

曹洞宗の台湾別院は、名目上は台北に暮らす日本人信徒のために開かれた。この寺院は永平寺派に属し、当初から日本本土からやってきた住民のための寺院という意味合いが強かった。

この観音禅堂は1914（大正3）年に開かれている。現存する本堂は3年後に竣工したもので、古さは感じないものの、すでに90年以上の歳月を経ている。ここは台湾人信徒のために設けられ、同時に台湾人僧侶の修行の場となっていた。本堂も日本式ではなく、赤煉瓦を用いた三合院建築となっているのが興味深い。堂内正面には大本山永平寺の第67代住職だった北野元峰禅師の筆による「萬徳圓滿」の扁額が今も掲げられている。

戦後は別院とともに東和禅寺を名乗るようになった。別院の本堂は国民党政府に接収され、敷地も中国から逃げ延びてきた人々に占拠されていたため、観音禅堂が寺院としての正統を受け継ぐことになった。

別院本堂の跡地は1993年1月に「台北市青少年育楽中心」の建設が決まり、鐘楼を除いて撤去されたが、こちらは改造こそされているものの、往時の姿を留めている。現在、境内には壁に埋め込まれた石碑のほか、地藏尊が残る。台座には世話人



となった人々の氏名が記されているが、その大半は日本人のものである。表情はとても穏やかで、静かに台北の歴史を眺めているかのようである。



戦後は東和禅寺を名乗るようになった観音禅堂。本堂には九重葛が覆うように繁茂している。



境内には日本統治時代に設けられた地藏尊が残っている。信仰の対象として手厚く守られている。台座には世話人として日本人信徒の名が刻まれている。

## 市長官邸藝文沙龍

ここは終戦まで台北州知事の公邸だった。閑静な環境にあり、敷地には鬱蒼と緑が生い茂っている。遠目に見ると、緑の中に木造家屋が潜んでいるかのような眺めである。

800坪におよぶ敷地を誇るこの建物は、当時の高級官舎によく見られた和洋折衷の造りである。全体の雰囲気は日本風で、落ち着いた印象を与えている。館内は畳敷きの部屋はもちろんあったが、間取りは洋風となっていて、家具などもすべて舶来物で統一されていたという。

この建物が竣工したのは1935(昭和10)年のことだった。建坪は152坪となっており、邸宅とし

ては当時最大級の広さとなっていた。戦時体制下であったこともふまえると、これほどの規模はやはり珍しいと言わざるを得ない。当時の官舎は職位階級によって造りが定められていたが、それはここにも受け継がれていた。

敷地内に植えられた植物にも注目したい。ここには亜熱帯性の常緑樹が植えられており、濃い緑が木造家屋のたたずまいを際立たせている。裏庭も広く、池などもあったようである。

終戦を迎えた後、ここは台北市長の公邸として使用されていた。しかし、ここ数年間は放置状態となっており、荒れ果てていたという。しかし、2000年11月に台北市がこれを整備し、芸術サロンとすることを決定。市民に開放された。現在は公共スペースとなっており、講演会や展覧会などが行なわれている。館内では詩集や画集、文芸作



かつての市長公邸は芸術サロンと変わった。館内は昭和時代によく見られた和洋折衷の造りである。



各種イベントのほか、展示会や講演会なども催されている。落ち着いた雰囲気のカフェも好評だ。喫茶スペースの様子。豊かに生い茂った緑を眺められる屋外席もある。

品などの販売コーナーもあって好評だ。散策の途中に立ち寄ってみたい休憩スポットである。

## 国立台湾大学法律学院・社会科学院

ここは総督府が管轄する高等専門学校であった。正式には台湾総督府台北高等商業学校を名乗り、開校以来、経済界に優秀な人材を送り込んできた学校である。創設は1919（大正8）年4月。一部の校舎はその時に竣工したものである。第一回の入学式は同年の6月に実施されている。

ここは台湾最初の旧制専門学校であった。校名は終戦直前の1944年に台北経済専門学校となっている。戦後は旧台北帝国大学の文政学部がここに移され、1947年1月には国立台湾大学に吸収合併されて、同学の法学院となった。

日本統治時代の台湾には、この学校のほか、台北帝国大学や旧制台北高等学校、そして各地の旧制中学などの高等教育機関があったが、いずれも台湾に居住する日本人子弟のために設けられた教育機関である。この学校の場合、台北帝国大学に比べるとやや台湾人学生の割合が高かったが、やはり台湾人の入学には厳然たる制限があった。

ここを訪れると、まずはどっしりとした校門が目に入ってくる。門柱は重々しい雰囲気を漂わせており、一見で戦前のものとわかる。この門柱は台湾産の石材が用いられており、上には銅製の燈器が据え付けられている。

正門脇には木造の守衛室も残っている。日本統治時代の守衛室が今も使用されているのは珍しく、しかも木造建築となると、ここ以外では旧台北帝国大学裏手の通用門くらいしか残っていない。小さな建物なので、見落としがちだが、訪問の際はぜひとも目を向けてみたいものである。

石組みの門柱を抜け、構内に入ると、正面に池があり、その奥に校舎が見える。この池は大きく、周囲と合わせると、ちょっとした公園のようである。ここに立って周囲を見まわすと、全体的にゆ

とりのある配置で校舎が並んでいるのがわかる。

構内の建物はいずれも煉瓦造りの2階建てである。これらの建物は1922（大正11）年に竣工したものである。これらので、すでに90年という歳月を経ている。柱にはギリシャ風の装飾が施され、欧風のたたずまいを感じさせている。若干の違和感を禁じ得ないのは、屋根に黒瓦が用いられているためだろうか。こういった建物は国立台湾大学（旧台北帝国大学）の校舎の一部などでも見られるが、いずれも独特な印象を放っている。

こういった瓦屋根をいなく西洋建築は、台湾では大正時代から昭和初期の大型建築にだけ見られる。現在、職人不在の時代を迎え、瓦屋根の保全は困難を極めていられると言われるが、この場合、保存状態は良好だ。教室や廊下、階段なども学校らしい雰囲気が漂っている。



赤煉瓦に黒瓦という組み合わせの建築は、台湾では大正時代に入ってから見られるようになったものである。



構内は広く、学生数も多くないためか、落ち着いた情緒が漂っている。講堂の様子。



木造の守衛室は今も使用されている。戦前からの守衛室が残っているのは珍しい。

### 椰子の根元に埋まった石碑

この学校の構内に忘れ去られた小さな遺構が残っている。「第十二回卒業生記念」という文字が刻まれた日本統治時代の石碑である。大きさにして60センチほどのもので、目立つものではない。

台湾でも卒業生が母校にこういった石碑を寄贈することはよく見られた。裏面には「昭和八年三月建立」と刻まれているので、この年の卒業生が贈ったものと考えていいだろう。「三月」より下の文字は、土に埋もれている。手で土を払ってみたが、そこに刻まれた文字を探ることはできなかった。

先にも述べたように、この学校の卒業生は大半が日本人である。日本が台湾の領有権を放棄した後、この地は台湾住民ではなく、中華民国の国民党政府に委ねられた。学校も台湾人ではなく、国民党政府によって運営され、日本人が建てた石碑は遺棄された。日本人にゆかりのある石碑の多くが撤去されたことを考えれば、原型を保っているだけ幸運なのかもしれない。しかし、ここに通っている学生や教職員は、やはりこの石碑の存在を知らない。

傷つけられなくとも、忘れ去られるという痛切な侘びしさは残る。石碑については記録が見あらず、当時の卒業生を探しだそうにも、高齢ゆえ、

非常に難しい。こういった調査は年を経るたびに難しくなっていく現実を思い知らされる。



知られることもなく忘れ去られた遺物。構内の片隅に眠っている卒業生寄贈の石碑には侘びしさが漂っていた。

### 旧日本郵船株式会社台北支店長宅

東門からまっすぐ東へのびる仁愛路を進んでいく。この道路は大王椰子の並木が整備されており、美しい。日本統治時代の都市計画で企画され、戦後、1958年6月に全通している。道幅が最大で100メートルと、台北で最も太い道路としても知られている。

この家屋は日本統治時代に旭町と呼ばれた地区にある。日本統治時代の末期に建てられたもので、すでに70年近い歴史がある。敷地は広いが、手入れの行き届いた緑で覆われ、庭園らしい雰囲気漂う。往来の激しい仁愛路からは想像すらできない閑静な空間である。

私は縁あって、家主である杜萬全氏（故人）を訪ね、この建物を撮影させてもらうことができた。門を入ると、大きな木造家屋が横たわっている。補修は施されているが、原型はしっかりと留めており、日本でも珍しくなった優雅な和風建築の雰囲気が漂う。別棟となった離れ家も保存状態が良く、木造家屋特有の建築美を誇っている。

この建物は戦時中、日本郵船株式会社によって造営され、台北支店長の邸宅として使用されてい

た。日本郵船は海運会社として、台湾と日本本土を結ぶ重要な機能を持っていた。その支店長宅ということもあり、造りの良さが際立っている。まさに、物資供給に制限があった時代のものとは思えない建物である。

終戦後、この建物は国民党政府に接収されたが後に売却され、杜萬全氏が受け継いだ。老家屋ではあるが、大切に扱われることで、建物はよりいっそうの落ち着きを放ち、美しさが増したように思えてならない。愛され続けることで、建築物は風格を増していくことを教えられる建物である。



手入れの行き届いた庭園。日本式の石灯籠が今も存在感を際だたせている。



広い敷地の中に木造家屋が横たわる。戦時中に建てられたものとは思えない優雅な造りである。建物は「L」字型になっており、屋内のどこからでも庭の緑を愛でることができるようになっている。



母屋へ垂直に接する離れ家も保存状態は良好だ。ここに暮らす住人の心遣いが伝わってくるような空間である。

片倉佳史 (かたくら よしふみ)

1969年生まれ。早稲田大学教育学部卒業。台湾に残る日本統治時代の遺構を探し歩き、記録している。これまでに手がけた旅行ガイドブックは30冊を数える。そのほか、地理・歴史、原住民族の風俗・文化、グルメなどのジャンルで執筆と撮影を続けており、台湾の社会事情や旅行情報などをテーマに講演活動も行なっている。著書に『台湾に生きている日本』(祥伝社)、『観光コースでない台湾』(高文研)、『台湾に残る日本鉄道遺産』(交通新聞社新書)など。編著に台北生活情報誌『悠遊台湾』がある。台湾でも『台湾風景印-台湾・駅スタンプと風景印の旅』(玉山社)などの著作がある。今年5月には李登輝元総統の著作『日台の「心と心の絆」～素晴らしき日本人へ』(宝島社)を手がけた。

ウェブサイト台湾特捜百貨店 <http://katakura.net/>

## サイクリングを通じて日台交流

愛媛県経済労働部管理局国際交流課

愛媛県は道後温泉などの訴求力のある観光資源や瀬戸内海や石鎚山などの豊かな自然環境に恵まれています。本県ではこれらを活かした海外からの誘客を積極的に進めておりますが、近年、取組みを強化しているのが、サイクリングをツールとした観光誘客です。

本県のサイクリング資源の代表格である、愛媛県と広島県を結ぶしまなみ海道は、世界で唯一、自転車で海峡を渡ることができる橋としてサイクリストからの評価も高く、橋上から望む瀬戸内海とそこに浮かぶ島々が織り成す景観は、世界に誇りうる絶景です。

中村知事は、このしまなみ海道を中心としたエリアをアマチュアサイクリストの聖地としたいという強い意志のもと、平成 23 年 11 月に台湾に本拠地を置く世界的な自転車メーカー・GIANT 社の劉会長を訪問し、本県の取組みへの理解と協力を求めました。

これを受け、今年 5 月 10 日から 15 日にかけて、

劉会長が代表を務める台湾からの訪問団 43 名が来日し、しまなみ海道を中心に瀬戸内の島々などをサイクリングする「日台交流 瀬戸内しまなみ海道サイクリング」が実施されました。

このサイクリングツアーは、劉会長が設立した財団法人自転車新文化基金会在が主催したもので、本県は広島県をはじめとしたしまなみ海道地域の各自治体と連携し、このツアーのサポートを行いました。

4 日間で計 265 キロを走行したこのツアーのメインイベントとなったしまなみ海道走行では、台湾からの訪問団に多数の国内関係者等が加わり、なんと 150 名あまりがサイクリングを行いました。





た。

サイクリングユニフォームとヘルメット、スポーツサングラスに身を包んだ150人あまりのサイクリストが、一列で来島海峡大橋を渡る姿は壮観であり、またその一団の安全走行を支えるため、GIANT社日本法人の主導によって整えられたサポート体制は、その一翼を担った行政側の認識を塗り替える、各方面への充実した配慮がなされたものでした。

本県としては当初より、このサイクリングツアーが今後のサイクリング施策にとって大きな布石となると認識しており、台湾のサイクリストたちに本県のサイクリング資源の魅力積極的にアピールするとともに、サイクリング環境向上のためのアドバイスをいただきたいと思います。

今回のツアーを通じて、しまなみ海道とその周辺地域のサイクリングロードについて、多くの方に高い評価をいただくとともに、標識の整備等、具体的な改善点についての貴重な意見も伺うことができ、その点だけでも、当初の期待を上回る成果を得られたといえます。

しかし、何よりも大きな収穫となったのは、来県された訪問団の皆様との心と心の交流でした。ともにサイクリングを行った中村知事のみならず、休憩ポイント等でサイクリング団を笑顔で歓迎した地域住民の方々、移動や宿泊、食事提供等に協力いただいた各団体の皆様、走行サポート等の支援業務にあたった行政関係スタッフ等々、多くの愛媛県民が、明るくエネルギーな訪問団メンバーとの交流を行うことができました。

GIANT社・劉会長は、自転車を通して自然とつながり、人とつながり、そして人生を楽しもう

というコンセプトである「RIDE LIFE」という生活スタイルを提唱しておられます。

「台日交流 瀬戸内しまなみ海道サイクリング」のあらゆるシーンで、この実践が見られたことは、今回のツアーをきっかけにしまなみ海道の魅力を世界に向けて発信し、今後、自転車を核とした施策の展開に取り組もうとする本県にとって、人と人とのつながりという施策の土台を再認識する、得がたい経験となったのです。

自転車はその土地土地の風土に寄り添う乗り物であり、風土は何よりも雄弁に、その土地の「人」と「魅力」を伝えます。

愛媛県では、今回の成果を台湾の皆様とより深い絆を築いていくきっかけと捉え、サイクリングブームに沸く台湾から、多くの方にしまなみ海道等に来訪いただくとともに、相互交流のための夢の架け橋である松山(しょうざん)空港 - 松山(まつやま)空港のチャーター便の実現に努めてまいります。

また、しまなみ海道とその周辺地域だけでなく、しまなみ海道以外の県内サイクリング資源についても、積極的なアピールとサイクリング環境の整備を行い、本県の魅力を一人でも多くの皆様に体感していただけるよう、心と心をつなぐ観光誘客の取組みを進めていきたいと考えています。

# 情熱とつながりの台湾1周

安部 良

## はじめに

日本が未曾有の危機に陥った東日本大震災は、日本人にとって衝撃を受けるもので、ひとりひとりが何をするのか？何をできるのか？が問われました。同時に、世界中からの本当に温かい支援やエールは、「これだけ日本の事を思ってくれているのか」と日本人として、心温まるものでした。命の尊さや人の暖かさを感じた、ひとりの日本人ができることとして、直接『ありがとうを伝えたい』と、僕は自転車でメッセージをつけて走ることにしました。4月下旬から1か月かけて世界最大の日本のサポーター「台湾」を1周。

日本人の感謝を伝えることを目的とした旅は、普通ではありえない出会い・つながり・サポートによって完成されました。その特別な台湾1周の様子をお伝えしたいと思います。

この自転車でメッセージを伝える旅は、今年の震災後から始まり、北米大陸カナダ横断8000KM、ニュージーランド南北両島1周4000KMと走って、台湾が3か国目になります。2011年5月27日、それまで自転車の旅の経験はおろか、パンクの修理、キャンプもしたことなく、自分でテントを張ったこともない者が、誰も知り合いのいないカナダへ。国旗とTHANK YOUのメッセージのサインボードを日本から持参し、大西洋の港町ハリファックスへ。太平洋の町ビクトリアまで、4ヶ月8000KMを走破。2012年に入り、東日本大震災の前にクライストチャーチで大地震があったニュージーランドを、震災から共に立ち上がろうとメッセージをつけて南北両島1周4000KMを走りました。そして、4月25日から台湾を1周の感謝の旅が始まりました。



カナディアンロッキーを越えた時

## 僕の3.11

3月11日午後2時46分は、さいたま市の病院にいました。末期がんの友人の最期のお別れに訪ねたため、もう1週間もたないと連絡を受け駆けつけていました。

体はガリガリ、声はほとんど出せず、目はうつろ。意識はあるようだけど、意思表示もすぐできないような状態。でもあの揺れがきたときは違いました。

地震慣れしている日本人だと、だいたい地震が収まるタイミングがわかりますが、なかなか収まらない地震。揺れはじめは、病院の外で工事している影響だと話していたものの、次第に地震と気づき、さらに「やばい」と病院のスタッフも慌てはじめ、悲鳴も聞こえました。そんな状況に、友人はベッドからむくっと起き上がり病室にいた奥様やお母様方に「逃げるぞ!」と強い口調で一言。病室のあった2階から、階段を肩を組んで避難。フットサルチームのキャプテンで、一緒にスキーにいった事もありスポーツ好きで元気な人でしたが、1年半前にガン摘出手



術をしてからあつという間でした。奥さんと3人のお子さん、経営している会社や新築の家などを残し、41歳の若さで亡くなりました。肩を組んだときに何か託された気持ちになりました。

一方、震災後東日本は大混乱。テレビは1週間緊急番組。仙台空港に津波が襲われる上空からの映像、真っ黒な波が防波堤をこえて町を呑み込んでいく様子を映し出すテレビ、日に日に不安が募っていく福島原発の原発。

異常な回数の余震、電力不足と放射能で東京も混乱。さいたま市南区でも何度も計画停電が実施されました。義援金を出したり、幼い子供がいる友人へ水を送ったりしながらも、30歳という人生の区切りを目前に控え、無力感で、悶々とした時間を過ごし、体調も優れませんでした。「日本がこんなことになっているのに、自分は日本のために何もできないのか・・・」

残された者として何をすべきだろうか。気持ちを整理して、前を向かなくては。亡くなった友人や震災で犠牲になった人たちが、今なにを言うだろうか？

「おまえのやりたいこと、まっすぐやれ」

「後の日本を頼んだよ」

『二度ない人生、悔いのないように生きたい』と思っていながらも、なかなかチャレンジせず楽なほう楽なほうと現状に流されてしまっている事が多い自分。

死ぬまでにやりたいことにチャレンジしようと、自転車で大陸横断を決断。同時に、その横断を通して日本人として震災へのサポートへ感謝を伝えよう。そしてカナダへ向かう飛行機に乗り、ぶっつけ本番で北米大陸横断へ向かっていったというわけです。

## 台湾1周の概要

台湾1周は

期間：4月25日（台北着）から5月25日（台北発）

距離：1200KMを想定

行程：台北から東周りで1周（宜蘭→台東→高雄→台中→台北）

目的：日本人の気持ち「ありがとう」を伝えること

今なおある台湾からエールのメッセージを被災地域へ届けること

用意：缶バッジ、名刺、国旗、サインボード

自転車で走り、台湾の人たちと交流しながら、台湾島19の市・縣を訪問し市長・縣長様はじめ地域の代表する方に、東日本大震災で特に被害が大きかった6県と、太平洋沿岸部54市町村へエールのメッセージをポストカードに書いていただく。ポストカードの各19地域のデザインのものを使用。

カナダ・ニュージーランドを走り、日本人としての応援して下さる場面がたくさんありました。それをその場止まりにせず、肝心の日本へ伝えたいと、ポストカードにメッセージを書いていただいて、日本へ送ることにしました。



永本冬森さんのデザインの缶バッジ。永本さんはカナダで有名なアーティストで、僕の旅にアイデアやデザインを提供してくださっています。

## 着いた直後の台北は雨ばかり

4月25日

NH1187 便で松山空港に到着。天候は雨。空港のロビーのドアから出たとたん、もわっとする”THE 蒸し暑い” 感じ。台北 101 も見えて、「台湾にきたな〜」と気持ち。そしてこの瞬間から自転車に乗っていなくても感謝の旅です。予約した台北駅前の安宿まで松山空港からタクシーで向かいます。この時の運転手さんと台湾ではじめてのコミュニケーション。「感謝を伝えたくて台湾に来ました、ありがとうございます」と缶バッチを渡しました。英語も通じない方でしたが、漢字で筆談。

雨もやみかけてきたところで、早いうちに台湾に慣れたいので、夜は、駅の周辺から西門街のあたりまで歩きました。

4月26日

天気はまた雨。この日は、自転車を組み立てて、携帯電話のレンタル、両替など、本格的にはじめる準備と、交流協会台北事務所へご挨拶。領事室の M 室長と文化室 Y さんにお会いしました。交流協会の皆さんと接点が生まれた理由は 3 つあります。1 つ目は、カナダ横断した際にお世話になったバンクーバー総領事館の I 領事が、今回の感謝の旅について台北事務所へ連絡をしてくださった事。2 つ目、交流協会のホームページで、この旅の内容を告知してくださった事。3 つ目台湾 1 周で訪問したい各市・県へ首長様宛に面会依頼をしたうち、宜蘭縣からのお返事が交流協会台北事務所へ届いていた事。

この時、M 室長からうかがった、1999 年台湾大地震の際の日本の救援隊と台中日本人学校のエピソードは、この旅のハイライトのひとつになっていきます。Y さんは、宜蘭縣からの連絡を受けて下さった方。このあと旅の間さまざま形でサポー

トして下さいました。

## まずは慣れるために

4月27日

この台湾 1 周は目的をもった旅で、普通の自転車で走ることに時間を割かなくてはいけないし、各地で準備しなくてはいけないものも出てきます。そのためには早く自転車で移動することに慣れたい。到着 3 日目から自転車での移動開始。基隆市まで約 30KM。天候は雨、、日本を発つ前に調べた天気予報通り。でもカナダ横断・ニュージーランド 1 周で、豪雨の中峠越え、雷に遭遇などを経験済み。しとしとふっている分には大丈夫。準備もしてあります。雨では、靴が濡れしまうのが一番きつい。そこで足が汚れるのは諦めて雨でも走れるように履きやすいサンダルでサイクリング。このサンダル、ユニクロで 990 円で買って来たものですが、雨の日でなくても、街を歩くときにもサンダルは活躍しました。

基隆市までの道のりは、旅の試金石になると思っていました。自転車のメッセージにどれだけ気づいてくれて、どんな反応があるのだろうか。台湾はすごい反応だろうと勝手に想像はしているけど、そのすごさはやってみないとわからない。

案の定、嬉しい反応が続々とおきます。中でも印象的なものを 2 つ。まずは、大同路一段 COSTCO すぎたところ。後ろからきた車が減速しにこにこしながら「加油!!!」と声をかけられ、袋が差し出されました。車には家族連れ 3 人が乗っていて、袋の中身は、なんと豚カツ弁当。しかも熱々。先で U ターンし、反対車線を走っていきました。自転車を見てわざわざ追いかけてくれたのです。



骨付きのとんかつは初めてでした

その次は、新台五路一段で信号待ちのところに、「写真いいですか？」と、かたことの日本語で若者から声を。彼らはスマートフォンで写真を撮っていたので、缶バッチと一緒に名刺も渡します。その日の夜に、フェイスブックページに写真を投稿してくれていました。



FBに投稿してくれた写真

雨にも関わらず、こうした反応があるのは嬉しくて「台湾にきてよかったあ〜」これから楽しみもやる気が倍增しました。

4月28日

基隆市では2泊。有名な廟口夜市へいたり、WIFIが使えるように手配し、街中で使えるお店での動作確認、訪問先の旅の細かいスケジュールの調整。これからの予行演習と台湾の雰囲気になれる時間にあてました。(基隆市は、市政府訪問のために、もう一度くることになります。)

4月29日

初訪問になる宜蘭縣へ向かうのに、基隆を出発、礁溪温泉まで。海岸線沿いの道を走ります。この日は、日曜ということもあり、車から声をかけられ、写真を撮られたり、缶バッチもその日分として用意していた30個のほとんどなくなるような状態。

海岸線沿いには漁村がところどころにあり、そこにもコンビニがありました。それでかなりの安心感が得られました。カナダだと100KM補給するお店はおろか、日陰もないようなところもあったり、ニュージーランドではカナダほどではないけど数十キロ何もなかったところもありました。コンビニはほとんどなく、ガソリンスタンドの売店程度。



魯肉飯は台湾中で食べましたが、礁溪温泉で食べた魯肉飯が一番おいしかったです

礁溪温泉までで、ほぼ台湾の自転車の旅に慣れる。自転車で一日で80KM程度走り、雨も体験。3つの街へ行き、食べる場所、宿などの探し方。

そしていよいよ。自治体政府を訪問が始まります。

## 初訪問

4月30日

宜蘭の街に着いたら安心しました。東海岸は田舎で、人も少ないのではないかと。街中でも必要な情報やお店を探ることができないかもしれない、と不安がありましたが、十分すぎる大きさと安心。「ここでこれだけの街なら、ここから先（花蓮や台東）も大丈夫だ」とほっとしました。

そして台湾の自治体訪問、初めての場所、宜蘭縣政府。この日は、自分の誕生日。これからはじめるぞ！と気持ちが自然と湧いていました。政府へ到着したら、新聞科彭さんが日本人建築家が設計した縣政府の建物を案内して下さいました。昨年9月遠泳で台湾へ感謝を伝えに来た人たちが、泳ぎ着いたのが宜蘭縣。さまざま日本との縁について教えていただきました。

陳秘書長にメッセージを書いていたのは、政府内の郵便局でそのまますぐに投函。このポストカードにメッセージを書いていただくことは、初めてで慣れていませんでしたが、これが台湾の声として少しでも被災地へ届けばと強い思いをもってやろうとしていることの始まりで、少し落ち着かない気持ちでそわそわして投函しました。

## 断崖とのどかな花蓮から台東まで

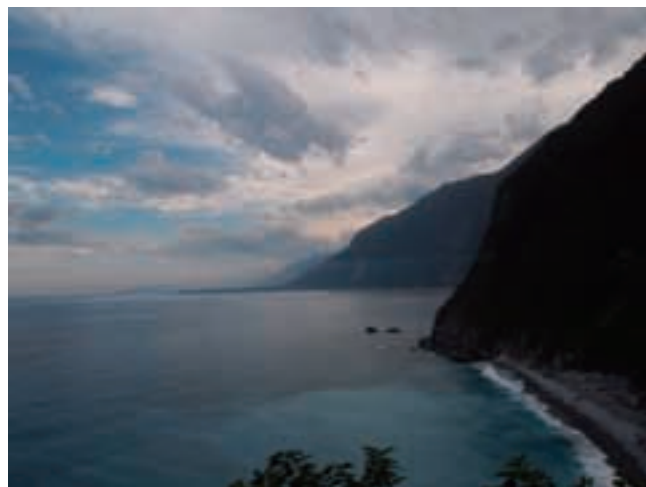
5月1日

花蓮市までは、海沿いの断崖を走ります。アップダウンが多くて比較的大変なところでした。登



陳秘書長にお会いした時は結構緊張していましたが、これから台湾で有意義な時間になるだろうと予感を持った時間だったのをよく覚えています

り坂を晴れて蒸し暑い中でしたが、ここでも道中ペットボトルで水を下さる方がいて、出会いと景色を楽しみながら走りました。雨がたくさん降るとがけ崩れなどの恐れもありましたが、それはなし。道は狭く、トラックやバスなど大型車も結構走るところで、くねくね道で先が見えづらいので自転車は気をつけないといけない区間。しかもトンネルが多い。トンネルは暗く、いくら旗を立てて目立つ自転車でも、暗かったら見えません。注意していました。



絶壁の清水断崖

ここを走り台湾の坂道の特徴を感じました。それは、登りはじめたら上りっぱなし、下り始めた

ら下りはなし。通常、長い坂道にはところどころ少し勾配が緩るく平坦なところがあります。一瞬そこでペダル漕ぐ力が楽になり息をついて、またのぼる。でも今回台湾で1周走った長い坂道で、そういった一瞬の平坦な場所はほぼありませんでした。自転車で走って見ないとわかりづらいことですが、道を作り方、道を通す環境の違いを感じました。

5月2日

花蓮でお会いできたのは、縣府観光暨公共事務處長 蘇處長。結構英語でお話できたのですが、連絡を取り合っていた縣政府の観光処の馳さんが日本が上手で、ところどころ訳してもらいながら面会。

この日は、縣長様が台北に出張されていて、午後台北までポストカードをもっていったうえ、文面を考えて、蘇處長が代わって書いてくださいました。こうした経緯も含めて丁寧に対応してくださった馳さん。「ミッション達成しましたよ」とのメールを読んだときには、一緒にこの台湾1周をしている気持ちになりました。青森から千葉までの6県の県知事様宛てられたメッセージ。台湾からの気持ちは届いているだろうと思います。

それから瑞穂まで走ります。瑞穂は今回の旅でとまったところとしては、一番田舎でした。花蓮からの道のりは、山と山の間で農村地域、のどかなところを走っていきました。この日は雲行きが怪しく、いつ雨が降ってもおかしくないと感じていたけれども、幸い瑞穂に到着するまで雨は降らず。駅のすぐそばに宿をとった瑞穂では、日本語が少し通じるおばちゃんが出て、こんなところでも日本語わかる人がいるんだと、台湾は日本語通じるという噂が本当なのだと感じました。

5月3日

日本人を感謝の気持ちを示すための旅でもありますが、地球を感じたいと大陸横断を試みています。カナダではスペリオール湖の北側を6日間かけて走ったり、大平原を1000KM近くも走ったり、ロッキー山脈を越えたり、ニュージーランドでは南十字星をみたり、日本に居てはできない事をやってみたい。

北回帰線のモニュメントでは、「ここより南は熱帯地域になるんだ」と、台湾は雰囲気は日本に似ているところが多く、アウェイな気持ちもさほどありませんでしたが、熱帯突入というのは、日本じゃないんだと改めて思いました。さらに台湾は、頭の上から陽に照らされる。回帰線通過は、その感じが目に見えて分かるところでした。



北回帰線通過

花蓮の観光処の馳さんが、世界的にも評価の高い珈琲が名産です！と強く推されていたので、瑞穂にある舞鶴珈琲園でひととき入れました。といっても瑞穂から1時間もしないところにあり、北回帰線からすぐのところ。曇っていて眺めはよくなかったのですが、カフェ好きなものとしては気持ちのいい場所でした。

珈琲農園もたくさんありカフェも併設されているところもありました。小高い山を越えていくので、晴れていれば景色は最高だと思います。この



晴れていれば素晴らしい眺望だろうテラス

花蓮から台東までの山の中を走った地域は、日本でも山間の農村に似ている（長野県安曇野や大町あたりなど）と感じました。ニュージーランドだここに牛や羊、とうもろこし畑にあたるのでしょうか。こうゆう里山の雰囲気大好きです。

5月4日

午前中、台東縣政府を訪問しました。実は翌日午後の音楽鑑賞会にお誘いいただいていたのですが、無理を言って1日早く訪問。邱参議にお会いしお話をさせていただきました。メッセージをお願いしたところ「県知事宛ならこちらも縣長が書かなくては」と。ポストカードを託しました。花蓮と同様黃縣長メッセージを書いている様子を、社會處 朱副處長が送っていただきました。

ここまで来て宜蘭、花蓮、台東とどこでも台湾のみなさんの温かい対応。本当に嬉しくて、ありがたくて。。

この日は移動せず午後スターバックスで過ごしていた時、この1週間を振り返りながらひとりでこみ上げてくる熱いものを抑えていたのを覚えています。



邱参議・朱社會處副處長

## 最南端から北上を開始

5月5日

この日は台東から墾丁まで。登りが一番長かったと思います。台東から本格的な山越えになるまでに60KMぐらい走ったうえでの、峠道。峠は屏東縣との境で、小雨が降っていて、景色はあんまりでしたが、かんかん照りの中、峠越えるよりも楽でした。下るのにつれて晴れていきます。

墾丁につくまでの道のりでは、サイクリングしている人たちにたくさん会います。みんな僕みたいに荷物を積んでいないから速いので、抜かされるたびに声をかけてくださり、山越えと暑さの消耗も忘れて楽しく走っていました。墾丁に着いたのは土曜日ということもあり、ものすごい人でした。なんじゃ！ここは！と思いました。原宿の竹下通りか！と思うような人ばかり。車道は、車が走れるような状況ではなく。同時にホテルも週末料金で高くなっていて、食べる場所も他の地域よりも高め。肉絲炒飯が70元（だいたい場所なら60元）

ここでカレーっぽいものを食べました。周りみんな食べていたので、僕も真似したんですけど、ぜんぜんおしくなかったですね。味が薄くて、こくやうまみもあんまりなくて、「えっ、なにこれ？」って。



カレーっぽいのはこれ

5月6日

昨晚のにぎわいはどこへいったかという朝の墾丁。道も車がすいすい走れるようなところ。自転車で走っていると、「こんなところまで自転車で行ったんだ」とわかる写真を撮りたくて、珍しいところや名所に行ってみたいと思っています。台湾最南端はそのひとつです。すぐそばの灯台は公園で、大きな駐車場もありバスが停められて観光客がたくさんいましたが、最南端は少しわかりづらいところにあります。実は最南端までいけるようになっていると標識も碑があるだけ。ガイドブックを持っていませんし、言葉ができないから道を細かく聞くこともできないけど、探してたら



最南端はモニュメントしかない小さなところ

小さな標識を発見。ジャングルの中の遊歩道を抜け最南端の碑へ。台湾の南細長い先端に来たんだなとちょっと感慨深い。見える景色は、生い茂った木々と海との景色ですが、晴れていて海もきれいできもちよかったです。



墾丁には原発もあります。それはビーチに近いのなんのという距離。福島原発事故があった日本人として、地球にいる一人として、きれいな景色が長い間続くことを祈ります

この日は日曜で墾丁から高雄方面へ向かう道を走り、週末を楽しんだ人たちの帰宅と重なったので、たくさんの人とふれあうことができ、夜フェイスブックにはこう書きました。

今日はほんとホントいろんな人に出会い、サポートしてもらった。こんなのありなの？っていうぐらい。台湾最南端であった日本語上手な許さんと友達、ありがとう。大きな水のペットボトルをくれた二人組ありがとう。パンクしながら追いかけてくれてジュースをご馳走してくれたおじさんありがとう。その時車からきてくれた英語を話せたカップルありがとう。4人で車に乗っていて、セブンイレブンのサラダをくれた人ありがとう。家族連れで大きい冷たいジュースをくれた人ありがとう。車2台で男女8人で声をかけてくれたグループ、缶バッチが2個しか渡せなくてごめんなさい。トラックを停めてこれまたジュースを下さったご夫婦、飲み終えていたその前のカップのゴミまで持って行って下さって、ありがとう。

今日は自転車では持ちきれないくらいの水分でした。

その他、道中わずか100KM程度なのに、本当に本当に多くの声、手を振ってのエール、ありがとうございました。この30度越えて蒸し暑い中、朝食昼飯無でも100KM順調に走れたし、めちゃくちゃ楽しいサイクリングでした。すべてみなさんのおかげです。感謝しています、ありがとうございます。無事、屏東市に着きました。誠に謝謝!!謝謝!!

## 濃密な出会いが連鎖していく

5月7日

屏東縣の曹縣長が会って下さった時間は、月曜日の朝の8時半。週の仕事を始まる大事な時間に、こうして会って下さるに本当に感激。お話では、2009年88水害の際静岡から届いて義援金の目録や、日本人作家に屏東で小説をかいてもらう企画の話など、日本との縁の深さも教えて下さり、被災地へのメッセージも非常に丁寧に書いてくださいました。日本へ訪問する予定があるらしく、メッセージの宛先を改めて確認の連絡をいただき、このポストカードを大切に下さってるだと強く感じました。



屏東縣の曹縣長

屏東から高雄まで向かう最中、長い橋を渡り、高雄へ入っていきしばらくしたところで、一人の青年に声をかけられます。話聞くと、震災後に女川へボランティアに行ったと・・・、

僕はボランティアに行く勇気もなかったし、行っても大したことはできないと思ってしまっていました。すごいですね。台湾からわざわざ行くのであれば、日帰りなどではなく数日間滞在し活動したはずですよ。そこまでしてくれる方がいることに感動しました。女川の人たちも、チカラになったと思います。



女川へボランティアに行った青年

高雄では交流協会の高雄事務所にお邪魔し、野中所長へご挨拶。震災後の台湾の人たちが、ことあるごとに家族や友人は大丈夫なのかとそれが半年ぐらい続いたと伺いました。日本の震災の事は時間が経つにつれて忘れられ、もうとっくに復興しているものだと思っている人もいます。台湾の日本への関心度がいかに高いのか、伺い知る事ができました。





野中所長との写真

野中所長には、日系商社のSさんと、写真家でベストセラー作家の有川真由美さんをご一緒させていただく場を作っていただきました。この時のお話がとても有意義でした。海外旅行へ行かれると、改めて「日本」が見えてくる体験される方は多いと思います。僕の日丸立てた自転車で走りながら、感じる事はたくさんあります。なんとなく感じてることもあり、はっきりつかみきれていない事もある。

海外経験の長い3人のお話は、「台湾に対する」なるほど」と合点がいくことがたくさんあったし、自分の中のなんとなくをはっきり見つけることがたくさんできました。そして「日本」に対する思いも強くし、確信も深まった、本当に上質の時間でした。

余談ですが、高雄はとてもきれいな街でした。台北よりもずっと道は広いし、整備されている。台湾らしいところもあり、近代的な建築物もあり、水辺の景色もいい。僕が訪れた台湾の中の最もきれいな街です。有川さんにはバイクで宿まで送っていただいたのですが、この短い時間がめちゃくちゃ楽しかった。自転車とは違うスピード感は新鮮だったし、台湾＝オートバイってイメージもあるんで、台湾を体感しているような感じでした。

5月8日

高雄市では、秘書處国際事務科 A科長にお会いしました。すごくにこやかで穏やかな方。ポストカードも真剣に考え、そのお人柄伝わります。この部署で働いている方は、いい雰囲気を感じました。



A科長の写真

ここで通訳にしてくださった、陳さん。高雄市は東京都八王子市と姉妹都市ですが、陳さんは姉妹都市になる前から、八王子の大学へ留学していた、このお仕事に就くのが必然だったような方。人の縁であるものですね。

A科長の机の上には、僕が送った手紙がありました。今回、19の自治体訪問するにあたり日本からその気持ちを手紙にし、各縣と市長さま宛に送りました。手紙は日本語と北京語です。知り合いも誰もいない台湾でいきなり各地域の要人に面会を依頼するのに、気持ちをお伝えすべく北京語ができる人を頼って、訳してもらったのです。

その一人に、カナダ横断した時に会った友人がいます。約20年前彼は、世界1周し最後に台湾まで来たのですが、日本へ帰るお金がなく途方にくれていました。見ず知らずの人がその話をきき、日本までの飛行機代を出してくれることになります。日本でアルバイトし、再び台湾へ返しにいくと、

「要らないよ。」

「それでも返したい。」

「そしたら今から有給休暇を申請してくるから、このお金を使って台湾を周ろう」

と、二人で台湾を1周したそうです。

そんな経験から今、バンクーバーとロッキー山脈の間の大自然の中で素敵な B&B を夫婦で営んでいます。その話を聞いたときから、台湾の人た

ちは暖かい人たちがばかりだと思っていました。

こうして台湾を走っているようで、これまで出会った人たちに支えられて、つながりによって走っています。まさに旅は人生の縮図です。こんなつながりに台湾でも助けられます。それがはっきりするのが高雄から先。

その様子は次回に。

安部 良 (あんべ りょう)

1981年埼玉県生まれ 成蹊大学卒業

金融先物取引、新宿伊勢丹、損保ジャパンで営業や接客を経験。

2011年東日本大震災後、日本人として「顔の見えるカタチで、世界に感謝を伝えたい」と単独自転車の旅は行く先々で感動と共感をよんでいる。はじめて1年、走行距離は13000KM以上に及ぶ。

マラソンが趣味のひとつで現在7回完走している。

<http://www.ryoambe.com/>

## 交流協会 学生交流事業

交流協会では、日本と台湾との若者世代の交流促進のため様々な招聘・派遣事業を実施しています。平成24年2月5日から2月12日まで台湾の日本の人文社会科学研究（歴史・社会科学・経済・政治・外交・法学・商学・教育等）に関心のある大学生15名を現代日本社会や文化に対する理解を一層深めるために東京・長野に招聘しました。

訪日前には、日本の政治、外交、社会情勢等について2日間の集中講義を行うとともに、日本では早稲田大学における「戦後日本の台湾認識」と題する講義及び日台の学生による意見交換、発表、信州大学訪問、また、文化体験では、ホームステイ、茶道、着物等の日本の伝統文化を体験し短期間の日程ながらも多くのプログラムを通じ学術や文化・習慣に触れることが出来たようです。

今回招聘した15名のうち、男性2名女性4名の訪日報告書を2回にわけてご紹介致します。

### 本当の日本、初体験

国立高雄第一科技大学応用英語学部  
王静儀

「お客様に連絡致します。当機はまもなく羽田国際空港に着陸致します。ご自身のお席にお戻り下さい。」

今朝、家を出る前に私は日本のジャニーズアイドルである大野智の最新ドラマ「もう誘拐なんてしない」を見ました。まさかその日の夕方にはその撮影現場にいるなんて信じられません！高等専門学校で日本語の勉強を始めてから3年ほどになりました。しかし日本の理解は本やドラマなどの偏った知識にすぎません。今、ようやく桜の国の本当の姿を目にし、その生活を実際に体験できるのです。ずっとこの時が来るのを待っていました。私は深く息を吸いこみました。まるでこれが白日夢のように感じられました。

飛行機を降りると、赤紫に染まった美しい夕焼けが私たちの到着を出迎えてくれ、とても嬉しかったです。初日の夜、私たちは新宿の竹庭（居酒屋）で現在流行している「女子会」を体験しま



した。レストランの内装は女性の好みに合わせてあり、メニューの多くは野菜と簡単なおつまみでした。これまで日本の飲酒文化は男性の一団が居酒屋で集まっている場面から進歩していないと思っていたのですが、現在は「女子会」以外にも、伝統的なイメージを変えるような、一緒にケーキを作る「男子会」があるそうです！

2月の東京は摂氏3度程度でしたが、空気が乾燥しており、台北のように湿った寒さではないので、私たちはすぐに適応できました。それにその日の夜には多くの日本の女性は寒さも恐れず、とても短いスカートと靴を履いて歩いているのを見ました。彼女たちの美意識にはとても感心しまし

た。その後私たちは24時間営業の一蘭ラーメン店へ行き、お客のニーズに合った日本のラーメンを実際に体験しました。注文は自動販売機のような食券機で行い、とても便利で、また素早く注文できました。特別だったのはどの席も個人的な空間になっていたことです。席の前にも簾がかかっていて、お客は何の邪魔も気にせずラーメンを食べることができます。これほどまでにお客の立場に立った考え方するなんて本当に気が利いています！トイレも完璧で、無休の関係からなのか、ウォシュレットやおむつ交換台だけでなく、一番クールだったのはトイレに20ロール近いトイレトーパーが置かれていました。とても面白く感じたのは、私がとても惜しい気持ちで最後のスープを飲み干したら、丼の底に「この一滴が最高の喜びです。」という字が現れ、客に対して感謝を表しているのです。最後の言葉は私を驚かせ、また嬉しくさせてくれました。

翌日、私たちは台湾大学生の代表として有名な学府—早稲田大学で日本の学生と交流を行い、その後一緒に深川江戸資料館を訪れました。私たちのテーマは「戦後日本の台湾理解」であり、その後の討論の中で日本側の考え方を理解できただけではなく、このテーマを通して互いに意見を出し合い、多くの考えを生み出しました。これは千載一遇の素晴らしい機会でした。交流が終了し、私たちは自由時間を利用して彼らと話しをしました。日本の学生生活から台湾のドラマの話しまで色んな話しをし、その中で私たちの台湾ドラマは次第に日本の若者たちの間で旋風を巻き起こしていることを知りました。午後の江戸資料館では21世紀に生きる私たちが江戸時代の町並みへと足を踏み入れました。館内では文化的背景の資料や文献の他に最も私を魅了したのは当時の町並みの再現でした。一般的な住宅や商店、公共施設があり、どれも手に触れて体験することができるのです。道路に掛けられている布ですらその理由が

ちゃんと存在するのです。そのうちの一つの柄に鎌（かま）、輪（わ）、平仮名の（ぬ）を組み合わせたものがありました。それは「構わぬ」の意味を暗に含んでいるのです。

三日目の朝に私たちは国立国会図書館を参観しました。この訪問先を訪れる前、私は不思議に思っていました。図書館は図書館なのだから、一体1時間も何を見学するのだろうか、と。この国会図書館が驚きの連続だなんて思っても見ませんでした。地上4階地下8階の豊富な蔵書量以外に、先進的な設備、スタッフへ配慮した設計、細心の注意を払った保管方法がそこにはありました。例えば、オリジナル本の寿命を延ばすために、本の置き方を考慮しているだけでなく、温度と湿度は一年中一番良い状態に保たれていますし、書庫のライトも必要な時だけ点灯します。移動書架は学校のような手動ではなく電動でした。長時間地下で働くスタッフの精神ケアのため、まるで地上にいるかのように思わせる天井がある設計になっていました。最も驚かされたのは、台湾の図書館のように開架式でないことでした。利用者が本を借りたい場合、まるで病院で薬を受け取るかのように、先に申請表を記載しカウンターで受け付けられ、約15~20分後にベルトコンベアーで私の目の前まで本を運んでくれるのです。とても興味深かったです。

翌日、私たちは早起きをして善光寺へ行きました。ここは日本人が一生のうちに必ず訪れる宗教の聖地です。やはり、一歩足を踏み入るとその神聖な建築と景色に染まってしまいました。参道には多くの伝統が香る特色ある店が並んでいます。初めに私たちは本堂の前で一列に並び、腰を下ろして、住職が私たちに徳を分けてくれるのを待ちました。しかし、私の頭に急に落ちてきた数珠はとても重く、当時の私はとてもびっくりしました。靴を脱いで本堂へ進み、朝事を見ました。彼らの読むお経は全く異なったものでした。台湾

の不明瞭な読み方とは異なり、言葉一つ一つがはっきりと聞き取れました。その後、ご本尊の下にある真っ暗な道を進みました。その中には鍵があり、それはご本尊との縁を結ぶもので、極楽浄土への鍵です。道の様子も鍵の位置もわからず、通路内では叫び声が絶えず響き、みんなとても興奮し、緊張していました。最終的に多くの人が鍵を触ることが出来、満足のうちにこの意義深い戒壇巡りが終了しました。

長野の2日目、私たちは松代大本営の地下壕を見学しました。事前に歴史の教科書で防空壕の記述と世界大戦の遺跡に関して読んでいましたが、まさかその現場を訪れる日が来るとは思っても見ませんでした。本の中の温度の無い文字が全て目の前に現れ、一幕一幕の映像が頭に浮かび、その感覚はとても強烈でした。私たちはその混乱した年代には生きていませんが、日本のおかげで今日でも戦争の恐ろしさや当時の人々の生活の苦しみを感じることができます。日本が一生懸命に平和の重要性を伝えようとしていることに本当に感謝します。

「超巨大寒気団が日本に襲来し、各地の積雪は記録を更新し、長野県栄村では2.5mに達し、まるで住宅ほどの高さに迫ろうとしています。」

この旅行の一番の楽しみこそが長野県で体験する「雪」でした。長野へ行く途中に見えた真っ白な雪で覆われた山林はまるで甘い粉砂糖が降られたジンジャーブレッドを売る店に迷い込んだかの



ようでした。更に対比するかのように紺碧の空が広がり、このような光景が見られて本当に幸せでした。周りはどこも分厚い雪が積もり、かまくらを作り、雪合戦をし、そしてスキーの体験をした快感は忘れられません。初めてスキーを経験し、スキーブーツを履いたときはまるで足が石膏で固められたかのような感覚で、歩くのも困難でした。また山の上から滑り下りて来ると、遊園地のジェットコースターよりも刺激的で緊張しました。高速で滑り下りるときは、精神的な恐怖を克服し、バランスを保たなければなりません。初心者の私たちはあちこちで転びましたが、スキーが私たちにもたらした楽しさは全身の筋肉痛を忘れさせてくれました。

善光寺の宿坊を離れる前に、私たちに挨拶に来てくれた住職がこう言っていたのを覚えています。日本人の親切は下心があり、自分のためであり、本心からではない、と。そんな話を聞いていましたが、ホームステイで温かなもてなしを受けると完全に意識が変わりました。ホームステイ先のお父さん・お母さんは私たちに自分の娘のように接してくれて、私たちに多くの日本の生活習慣を紹介してくれました。また積極的に台湾がどのような国なのかを理解しようとしてくれました。知り合ってから帰国後まで、ずっと彼らの無償の世話を受けました。一緒にいた時間はたった1日半でしたが、とても深い感情を築き、離れる時には流れる涙を抑えることができませんでした。原稿を何も用意せずに話した最後の挨拶は上手く言えず少しイライラし、またとても可笑しかったです。台湾を離れ、日本に来る時に私は両親に「ってきます」と一言言っただけでした。まさかホームステイを体験して寂しさのあまり涙が止まらないなんて思いもしませんでした。なるほど、「田舎に泊まろう」という番組の中での感情の表れはまさに正真正銘本当の感情であり、番組的な効果ではないのですね。K<sub>1</sub>夫婦の愛情と身に余るも



てなしを受け、本当に嬉しく、また驚きました。こんな貴重なチャンスを得られたことは本当に幸せです。遠くない将来、私は再度長野を訪れ、K<sub>1</sub>夫婦とお会いしたいです。

最終日、私たちは特に早起きをして複雑な地下鉄に乗りました。朝5時には既に多くの人に乗っていました。そして多くの場所に地下鉄で行くことができ、とても便利でした。私たちはその日、築地市場へ行き、この世のグルメである刺身を食へに行きました。カウンターに座り、一貫一貫の寿司が寿司職人の手によって目の前に現れます。なんて素晴らしい美食の場所なのでしょう！他に、私がとても気に入っている日本の点は道を歩いても安心できることです。車が道を横断している人に割って入ることはありません。道路交通法によると、歩行者が絶対的に優先されるのです！

「萬巻の書を読むは萬里の道を行くに如かず」、この旅行は多くの驚きと感動に満ちあふれていました。これらの美しい思い出は決して本から得られるものではありません。ずっと随行してくれたSさん・Kさん・Hさん・T先生、本当にありがとうございました。あなたたちの手助けがなければ、私たちはこんなにも順調に、楽しく過ごすことは出来ませんでした。そして特に日本政府がこのようなチャンスを与えてくれたことに感謝します。私は本当の日本を理解することができました。訪日を経て刺激と啓発を受け、今後より積極

的に自分の日本語を上達させ、将来日本で造詣を深めようと思います。

## 無喧噪なビル群

政治大学中国文学科  
黄奕寧

日本は無喧噪、無垢な国  
それは何の感情も持たず、高い技術力を示すビルを建てる  
しかし街には人に知られていない数多くの物語が埋もれている  
所謂無喧噪とは、完全な静寂ではない

### 1. 出発

政治大学国際関係センターで授業を受けた二日間、台北は晴れ、そして翌日は雨でした。まるで出発前に多様に変化する台湾の気候を忘れないよう教えてくれているようです。「四度目の日本」。余るほどの興奮の他、今回は荷物の中に目一杯の冷静な気持ちを詰めてきました。

私たちは夕方五時に羽田空港へ到着しました。新宿までの道のりには整った道路と各種商店が見えました。六度の空の下、それらは余計に秩序あるように見えました。その日宿泊するサンルートホテルと新宿駅はたった三分の距離しかなく、多くのデパートが林立する他、あの有名な歌舞伎町にも近い場所で、私たちは東京の夜の生活を垣間みることができました。

新宿の町並みはとても奇妙でした。もしそれが東京都から独立した時空空間であったとしても言い過ぎではありません。人々は信号が変わると進む方向が変わり、道路の中央で交錯する瞬間、足を止めて人を観察する時間が一番楽しい、という荒木経惟の言葉を思い出しました。多くのビルの下で忙しそうにしている東京都民は一体何処へ行

くのでしょうか？私にとって日本の都市生活の底にある漠然とした、変化への不慣れな対応は探究する魅力となります。

## 2. 異なる地域/異なる自分

二日目の朝、早稲田大学へと行きました。若林正文教授の「戦後日本の台湾理解」に関する授業を受け、日台学生会議の学生と交流し、組毎に討論を行いました。最初にこの行程を知った時には少し緊張をしていました。自分の日本語がそのレベルに達しておらず、意見を伝えることができないのではないかと感じていたからです。しかし、日本の学生の多くが中国語の基礎を持っており、また台湾文化にも興味を持ち、その討論のプロセスは大いに盛り上がり、和やかな雰囲気でした。班ごとの討論で、私たちの班は、どのように日本の台湾に対する認識を強化するか、を主要な方向性とししました。目下台湾では多くの方法で日本の最新情報を得ることができます。台湾人は多くがテレビ番組の影響で、想像と理解が混在している部分は否めませんが、日本という国を既に良く知っています。しかし比較すると、日本人の台湾に対する認識はとても薄いものです。今回の討論を経て、私たちは台湾が多くの特色ある文化を持っているにも関わらず、最も有効的な方法で海外に広めてはいないことがよくわかりました。これは文化産業が考えねばならない課題であり、台湾が日本を手本として学ぶべき点であります。

今回の日本旅行は、幸運なことに多くの文化・教育に関連する団体や地域を見学しました。その中で日本は文化資産の保護や活用を相当重視していることがわかりました。私たちが国立国会図書館を参観したことが良い例です。国立国会図書館は日本で唯一の国立図書館であり、日本国内で出版された全ての出版物がここに送られ保存されます。そして類別毎や年代毎に保管され、利用者に完璧で便利な情報検索閲覧システムを提供してい

ます。図書を管理する行政組織全体の規模から見ると、日本政府は文化政策の推進に対して多くの力を注いでいるようです。

私たちは常に偶発的な縁で異国文化に対して興味や好意を抱きます。意識を介入させる必要が無い最初の感覚は往々にして後の調査への最大の動機となっていきます。今回、日本の大学生と交流し、私は異郷の地で人と人の間、文化と文化の間に情報が飛び交う中に自分たちの影を顧みることができました。

## 3. 微かな光

長野での研修部分は今回の重要なポイントです。長野と東京の間は約四時間ほどかかります。景色の変遷により都市と地方の強烈な対比を感じました。ビルによって切り取られた空から何処までも広がる地平線へと変わって行きました。私たちはその晩宿泊する善光寺の徳行坊へと到着しました。私は徳行坊の近くにある風情香る町並みが大好きです。特に夕方の時分には一つ一つ淡い黄色の街頭が雪の積もった石畳を照らしていました。雑貨店の雑然としたショーケースには白髪まじりのおじいさんの背中が映っていました。その光景は宮崎駿の映画に出てくるような一場面でした。

翌日の早朝、雪が舞い降る中、私たちはまだ明けきっていない空の下、善光寺へ参拝に行きました。そして朝食に一人の和尚が挨拶に来てくれました。

「・・・あなたたちが日本語を学んでくれたこと、日本を理解し、日本人と交流しようとしてくれることに感謝します。」確か、こうおっしゃったと思います。日本人は容易に個人の感情を表に現さない民族です。しかし、もし私たちが心を開いて文化の差を許容できれば、相手もそれを感じてくれるのだと思います。「どうかみなさん、この心をもって周りの人々に気を配ってあげて下さ

い」。これは簡単な言葉ですが、とても重要な知識が詰まった言葉であり、私はこれに感謝したいと思います。

善光寺を離れ、私たちは続けざまに信州大学と松代地区を訪れました。その途中には途切れることなく山々が続く景色が広がり、栗色の地表にまるでクリームのような雪が覆っていました。遠くから見るとまるでモンブランのようです。その日の午後、旧樋口家で行った和服と茶道の体験はとても特別なものでした。しゃべりすぎなお母さんたちに取り囲まれ、腰をきつく締められました。気まずくもあり、可笑しくもありました。しかし和服を着ると昔の日本女性がなぜゆったりと歩いているのかがわかりました。お茶を飲むだけでも容易なことではありません！初めて茶道の師範が目の前で厳格で細やかなお手前を披露してくれるのを見ました。一方でとても不思議に思いました。「お茶を飲む」行為は生活の中でのリラクゼーションであるはずですが、日本人の手にかかれば粋を集めた重要な文化へと昇華してしまうのです。

#### 4. 白銀の丘

私たちが素朴な城下町を後にすると、バスは飯綱高原へと向かい、轍と共に白銀の山へと分け入りました。

飯綱はまるで永遠に崩落することない白い城のようでした。枝や葉は粉状の結晶に覆われており、微かな風が吹いただけで木の下ではかさこそと雪が舞います。飯綱の冷たく、晴れた天気が私は好きでした。新宿の町並みのあの漠然とした順応し難い温度と比べると、ここの太陽の光は激しく人の心を動かします。一つ一つ力を込めて柔らかな地面に足跡をつけるのは楽しく、その後雪が舞い降り、その跡を消して行く様子を楽しみました。

スキー体験は私たちがこの数日間で一番期待し

ていたものの一つです。飯綱高原スキー場の敷地はとても広く、現場に到着するとスキーウェアに身を包んだ多くのスキー客が白い山の上から自由自在に滑り降りてくるのが見えました。全ての装備が整い、コーチは私たちにウォーミングアップをさせ、すぐにリフトに乗り、斜面の上へと上がり練習の成果を試しました。最初身体のバランスがとれず、何度も転んでしまいましたが、何度か失敗するとコツを掴み、達成感が湧いてきました。台湾は気候と地形に制限があり、スキーと接する機会はほとんどありません。コーチの細かな指導は言うまでもありませんが、今回この研修のおかげで身を以てスキーの楽しさと魅力を感じることが出来ました。私にとって忘れ難い思い出です。

川端康成の『雪国』の中で、主人公が列車に乗って雪国へと向かう場面があります。ガラス窓には現実とその逃避とが交錯した意識が映り、時空の流動によりそれが具体化するのです。あの時の飯綱高原の景色は私にその一幕を思い出させました。

#### 5. 太陽の方角

飯綱に泊まった二日目の朝、私たちは芋井地区へ行き、ホームステイ先のお父さんとお母さんと出会いました。現地住民の方々はとても熱烈に、そして盛大に歓迎会を開いてくれて、私たちにかまくら作りや餅つき等の農家活動を体験させてくれました。そして昼食を共にし、一緒に作ったお餅を堪能しました。ほとんどが年配のおじいさんやおばあさんでしたが、とても元気で、嬉しそうに私たちに長野の人や事、物について話してくれました。彼らの温かさを十分に感じ取り、またこの土地で育った人たちはとても長野のことを誇りに思っているのだと気づきました。

歓迎会后、私と Jenny は K<sub>1</sub> 一家にお世話になりました。玄関を入るとそこにはもう温かそうなスリッパが二足、居間にはたくさんのお菓子が用



意されていました。K<sub>1</sub>家はちょうど日の当たる斜面に建っていて、庭からは山林の美しい景観が一望できました。K<sub>1</sub>のお父さんはこれは毎日見ても飽きない風景だ、とおっしゃっていました。

その日は夜になると外は特に冷え込みました。しかし屋内にいた私たちは普通の日本人家庭のように、お酒を飲み、テレビを見たり、今日あったことをおしゃべりしたりしていました。そして世界で一番素晴らしいことと夕食を楽しんでいました。「普通こそが幸せなんだ」という言葉は恐らくこういう事を言うのだ、と考えていました。最も忘れ難いのは長野を去る朝、K<sub>1</sub>のお父さんが私たちに彼の写生作品をプレゼントしてくれたことです。そして長野の四季の美しさを教えてくれました。どの絵にも違った物語がありました。

私は長野の雪景色を台湾に持って帰りたかったです。

短い一晩のホームステイ生活でしたが、台湾から来た私たちにはここで最も特別で、最も温かい人たちと出会いました。しかし本当に不思議なのは出会いではなく、別れです。多くの人が日本人は近づき難い民族だと考えています。しかしこの日を境に私は誠意を持って接すればきっとお互いの心は通じあうのだと考えるようになりました。人と人のように、文化と文化もまた然りです。

## 6. 無喧噪

一週間以上のウィンターキャンプにも句点を打たなければなりません。しかし私にとって、本当の「理解」はまだ始まったばかりです。日本、工業大国の風格から曖昧な国民性まで、精緻な商品から輓歌的な芸術観まで、どの段階に於いても私にとってとても魅力があります。それらの間には衝突が生じますが、そのどれを除いても本当の日本とは言えないのです。

去年応募したウィンターキャンプですが、私は日本の流行音楽産業の美学再構築というテーマで

研究計画書を書きました。社会学とコミュニケーション学の観点から、日本が大衆文化を急速に発展させてからの流行音楽の歴史的軌跡の形成を分析しました。言い換えれば、傍観者の角度から日本の「声」に耳を傾けていたのです。いつの間からは忘れましたが、私はこのような方法で、音の中から私の考える日本のイメージを探すのです。恐らく息も絶え絶えの不安定さとその雰囲気は却って魅力的なのかもしれません。

新宿には新宿の音があり、長野には長野の音がありました。それらの清らかな姿の底に言葉を発さず、裂け目に身を隠している歴史が消えずに残っているのです。高い技術を象徴しているビルの下で、大和文化を代表する桜や武士道以外にも多くの言葉を失った記憶があるのです。

所謂無喧噪とは静寂ではないのです。

## 7. 後記

忙しく充実していた八日間の日程が終わりました。多方面から日本を理解できただけでなく、同時に他国の文化を理解する前に、まず自分たちの文化の含意を学ばなければならないと感じ取りました。これまで海外の生活に憧れていましたが、日本に来てから異文化の衝撃に遭ったことで、もう一度振り返り、自分の土地を顧みると、多くの違った観点が生まれ、自分自身がまだ完全に台湾を理解できていないことに気づきました。

私は台湾で生まれ育ったことに感激しています。

距離は美しさを生む、という言葉があります。地理的、文化的に見ても、台湾は日本に最も近い国です。しかし息苦しい圧迫感を感じます。二時間半のフライトで、私たちは多くの予想もできない可能性と繋がるのです。それぞれの色濃い文化の実情を通して、お互いが興味を持ち理解する視野を養うのです。それこそが一番理想的な距離なのだと思えます。

活動報告を書くことで、私は訪日した一週間の記憶を再度整理することが出来ました。書いている間、私は報告書がただの旅行紀になるのではないかと心配でした。一度修正すると、意識の流れ的な語調が混じってしまいます。しかし、漠然とした叙述は私にとってはとても重要なものなのです。大学生活最後の一年の完璧な紀行文として、書き終えた時は万感の思いでした。

旅行中の十四名の仲間たち、T先生、Hさん、Sさん、Kさん、本当にありがとうございました。

あなたたちとこの時に出会え、今後の私の成長を促してくれたことに感謝します。



信州善光寺通り



芋井伝統舞踊「獅子舞」

## 「日本研究支援 2012 年ウィンターキャンプ」

中興大学外国語学部

陳怡文

### 「出発前」

私が生まれた「屏東」は台湾で一番南に位置する県であり、避寒地である「墾丁」もここにあります。屏東は一年中夏のように、年平均気温は24~25度、最も暑い月の平均気温は30度以上にもなります。一番寒い月の平均気温ですら18度程度です。つまり寒さが一体どんなものなのかもわからない「温かい国」なのです。ですから私が2月に日本へ行くと話すと（ちょうどニュースで東京の大雪について報道されていた）、特に今回の日程の中にスキー研修が入っていることを知ると、私に参加資格を放棄するようという意見が次々と雨後の筍のように出てきました。しかし冬に生まれた私は寒さを恐れませんが、一日一日と日本へ出発する日を数えていました。

### 「初めての日本」

日本と台湾の距離はとても近く、それゆえ台湾から日本を訪れる人数も相当な数になるのです。日本政府観光局（JNTO）の統計によると、2008年には2300万人の台湾全人口のうち約1/16の人が日本を訪れているのです<sup>1</sup>。

飛行機は国土の延長、と言った人がいます。私はANAの飛行機の中で既に濃密な日本の香りを感じることができました。それは機内食です。私が乗ったことのある飛行機の中で日系航空会社の機内食は他の航空会社よりも比較にならないほど美味しかったです。

日本に到着後、「気温は確かに低い」と感じましたが、空気が乾燥している関係からかとても過ごしやすい気候でした。到着したその日の夜（2/

5) は居酒屋(竹庭)でOLの間で流行っている野菜料理を堪能しました。ここは「飲み放題」で、団員たちはアルコールの作用もあって、とても仲良くなりました。(ついでに書いておくと、団長は3杯お酒を飲むととても饒舌になりました。)

### 「大学・国会・資料館」

2日目(2/6)団員たちは日本の4大私立大学「早慶同立(2)」の中でも多くの文学家を育てた「早稲田大学」を訪れました。そしてそこで幸運にも若林正文教授の「戦後の日台関係」に関する講義を聴くことができました。その後、講義の内容について、日本の大学生と討論した経験は忘れられません。

続いて、3日目(2/7)には日本の国会図書館を見学しました。解説員は埃避けの靴カバーを履くように言うと、私たちを地下8階、深さ30mもある蔵書空間へと連れて行ってくれました。ここで私たちは年代の古い昭和の漫画やもう使われることのない電車の時刻表等を見ました。日本の国会図書館は書籍を「保存文化財」であり、日本の重要な国の宝なのだと考えています。つまり日本政府はそれらを完全な形で保存し収蔵する責任があるのです。館内の1階には利用者が資料をコピーしたり、本を受け取る場所がありました。もし私が日本で研究をする日が訪れれば、恐らくこの蔵書やコピーに相当頼るのだと思います。2階では日本の新聞を利用者に提供しています。ミクロ版で製本された新聞もあり、それらが整然と本棚に納まっています。ここから日本人の整理や収納に長けた特質を見ることができ、この点はとても感心しました。

昼食後、私たちは「深川江戸資料館」へ行きました。ここで江戸時代を模した古い町並みを見学し、Sさんの詳しい解説を聞きながら、江戸庶民の無駄遣いしない精神に驚嘆しました。一枚の服は大人が着て、子供が着て、雑巾になって、最後

には燃やされ、その灰が肥料になったり、道路敷設に使われたりしたのです。小さい頃から恵まれた環境で育った私たち都市の子供は自分たちの無駄遣いを悔いて、暗に今後は食事も食べ残すことがないように決めました。ついでに書いておくと、その日の夜、私たちは善光寺の宿坊で精進料理を頂きました。日程の中で私が食べた日本料理は毎食とても美味しく、台湾の夜市の料理を忘れてしまうほどでした(台湾の友人に言わせると許されない行為だそうです)。台湾に戻ると体重計は留まること無く高い数値を指していました。美食は女性にとって大敵ですね。。。

### 「法要・住職の『思いやり』」

4日目(2/8)早朝の日程はとても印象深いものでした。まず私たちは早起きをして善光寺で朝事と戒壇巡りに参加しました。早朝の寒さは足の先が凍えるようで感覚はありませんでした。ただ岸に上げられた魚のように飛び跳ねるしかありません。それにより血液の循環を良くしたのです。早朝の寒さ以外に朝事に参加できたことはとても得難い経験でした。朝事はたった10分程度で終わりましたが、団員にとっては寺の本堂の中で正座していると、足はあつという間に痺れ、寒さで感覚がなくなった両足をずっと揉みながら静寂を破る読経の声を聞いているのでした。時間の流れとともに、身を切るような寒さは僧侶の低い読経の声に覆われ、本堂の中には気持ちが穏やかになる雰囲気満ちていました。その後の戒壇巡りは実際真っ暗で、手を伸ばしても見えない状態の中をみんなで寄り添いながら(何に興奮していたかわかりませんが)、前へとゆっくり進みました。残念だったのは最後まで私は「極楽世界へ通じる錠前」に触ることは出来なかったことです。仕方ありません、また後日善光寺を訪れることにしましょう。

団員たちは宿坊に戻り、朝食を食べました。す

ると善光寺の僧侶が来られ、団員たちの前でとても印象深い話をして下さいました。それは日本人が他人に親切にするのは、それは自分に利益があるから行うのだ」「日本人のようにならないで下さい」「本当の親切はとても難しいのです」等々の言葉です。この事は私の大学時代を思い出させました。いつも他人に対して優しく接しようとしていたり、他人に対して私の好意を感じさせようとしていました。それらは自分のために行っていたのです。和尚が言うように、このような優しさは利害であり、身勝手なもので、時にはそれに気づかない場合もあります。この時私は初めて俗世間を離れた人、つまり僧侶と私のような世俗に塗れた人との違いを感じました。この話の中から私は多くの考えを得ることができました。例えば、日本文化が重んじていることは「他人の感情を読み、相手のために思い、最後まで細やかで丁寧な対応をする」(だから多くの礼儀に関する書籍がある)だと思います。しかし、和尚の視点から見ると、これらは矯正されたものなのです。最後には礼儀は一種の形式でしかなくなり、心の底からの『思いやり』ではないのです。この言葉を聞いて、私は堪らず「日本は確かに心遣いが細やかな国です。『どこでも他人の立場に立って物事が考えられています。自己満足で人に対して親切を行ってはいけないのだと私は自分自身を戒めなければ。』これは自分にとって相当厳しい考え方だけれども、日本人も常に他人のために考えるのではなく、時には自分ためを考えてもいいのでは」、とってしまいました。

#### 「善光寺・信州大学・松代城下」

朝食後は善光寺を見学し、その後信州大学を訪れました。団員たちは日暮し庵で昼食を食べると、松代城下内にある真田宝物館・樋口邸・真田邸・文武学校などを見学しました。その途中で和服と茶道の体験を行いました。その日の日程はと

ても充実していました。日本の歴史や文化の知識が大幅に増えただけでなく、和服や茶道の文化体験により多くの美しい写真も手に入れられ、今後お見合いする時には悩まなくて済みそうです。

#### 「地下壕・雪国とかまくら」

5日目(2/9)私たちは地下壕を見学しました。そこでは秀英高校の学生が戦争発生時のこの壕の用途やこの地に集められた日韓青年の友情について分かりやすく紹介してくれました。もしかすると戦争はとても簡単に種族間の隔たりを忘れさせ、心の底から外国人と友達になれるのかもしれない。

松代荘で昼食を食べた後、私たちは飯綱高原でスキー体験を行いました。「人生で初めてのスキー！」だった上に、自分の運動神経の悪さもあって、とてもひどく転びました。たった数時間の体験でしたが、とても印象に残りました。

アゼリア飯綱へ戻った私たちは夕食後優しいスタッフの方々が私たちのためにかまくらを作ってくれたと聞きました。(とても感動しました!)。私はこの場を利用して彼に感謝したいと思います。しかし彼の名前がわからず、ただ団員の中のあだ名である「灯さん」としか覚えていませんでした。

「機会があれば、必ず冬の長野を再訪する」、と私は心の中で決めました。そんな日が訪れればス



キー体験だけでなく、芋井地区のお父さんとお母さんを訪ねてみたいです。

### 「お父さん・お母さん、おやきと手作りの蕎麦」

6日目(2/10)ホテルを出発し芋井小学校へ行き、歓迎会に参加しました。そこで私たちのカッコいいお父さんとお母さん—H<sub>1</sub>夫妻に出会いました。お二人はとても明るく優しいご夫婦でした！簡単な自己紹介の後、みんなで一緒に現地の伝統舞踊を踊り、獅子舞を見ました。続いてその日の昼食である「お餅とこねつけ」を作り始めました。とても忙しそうで、みんな出たり入ったり。団員たちも手伝いました。最後にはつまみ食いをも手伝いました（でも本当に美味しかったんです！）。

恐らく私たちが昼間十分に餅つきに参加できなかったため、ホームステイ先に到着するとお父さんは10年以上もの経験をもつ蕎麦屋の友達を家に招き、自分たちでその日の夕食を作りました（太く切りすぎてもう少しで蕎麦がのどに詰まりそうでした）。農家同士の助け合いの感覚はとても温かく、芋井地区のみんなはとても仲が良さそうでした。

ホームステイ先に着くとすぐにお母さんが手編みのマフラーをプレゼントしてくれました。とっても暖かく、気持ちまで温くなりました。お父さんもお母さんも手先がとても器用な人でした。お父さんの職業は「大工さん」で、お父さんが作ったパズルをプレゼントしてくれました。お母さんも負けるとも劣らず、料理も編み物もとても上手でした。この文章を書いているとお母さんの料理が懐かしくなってきました。「おふくろの味ですね。」（笑）

金曜日にホームステイをしたおかげで、私たちは幸運にも週末に戻って来る娘さんご一家に会うことが出来ました。お父さんお母さんの3人のお孫さんはとっても可愛かったです！みんな優しく、家事を手伝っていました。翌日はお母さんの

手作り愛情朝食を食べ、2人の孫娘と一緒に戸隠神社へ参拝に行きました。

「一緒にいる時間はとても短く、一瞬で終わったかのように感じました。これは天が授けてくれた楽しい時間だったのでしょう」。歓送会では茫然自失という感じでした。

### 「感謝の気持ち」

今回のウィンターキャンプに参加でき、本当に嬉しく、また光栄でした。私に成長を促す考え方や原動力（例えば自分の下手な日本語をより上達させなければならぬ）を与えてくれました。そして交流協会が台湾の高校生・大学生・大学院生にこのような日本を深く理解できる機会を与えてくれていることに感謝します。

交流協会のKさん、通訳のSさん、交流協会高雄事務所のHさん、そして私たちの団長であるT先生がずっと面倒を見てくれ、随行してくれたことに感謝します。そして団員たち同士の助け合いや優しさに感謝します。台湾に戻ってもずっと連絡を取り合いましょう。この活動に関わった全ての人たちに感謝します。ありがとう！ありがとうございます！

\*1 日本の観光統計概要 [http://www.jnto.go.jp/jpn/tourism\\_data/index.html](http://www.jnto.go.jp/jpn/tourism_data/index.html)



## 台湾内政、日台関係をめぐる動向（2012年5月中旬-7月上旬）

# 馬英九總統二期目の就任、政府高官の収賄事件

石原忠浩（台湾・政治大学国際関係センター助理研究員）  
（元（財）交流協会台北事務所専門調査員）

5月上旬以降、世論の現政権への不満の高まりから、民進党を中心とした広範な抗議活動及びデモが実施された。かかる情勢の中で馬英九總統が5月20日に第13代の總統に就任した。5月下旬以後、政府はラクトパミン入り米国産牛肉の開放にかかる修正法案の可決を企図したが、立法院で野党の徹底抗戦に遭い可決されず、7月末に開催予定の臨時会で再び審議されることになった。7月上旬に林益世行政院秘書長が収賄容疑で逮捕される事件が発生し、クリーンな政府を標榜する馬政権に大きな打撃となった。民進党主席選挙が5人の候補によって争われ、蘇貞昌元行政院長が勝利し、主席に就任した。

5月末に駐日代表の異動があり、馮寄台氏が離任し、沈斯淳氏が新たに着任した。5月10日に交流協会台北事務所の新旧代表の離着任レセプションが催された。

### 1. 野党による政権批判の高まりと抗議活動

#### （1）馬總統への抗議活動

馬總統の二期目の總統就任式を前に、5月の台湾では現政権に対する抗議活動が民進党、台湾團結聯盟などを中心に繰り広げられた。

5月14日蔡英文前主席は、自身のフェイスブックで馬政権の施政を「独断的な政策決定を行い、国民の信用を失っている」と批判するとともに、内閣の全面改組などの要求を表明した。<sup>1</sup>右に対して、總統府報道官は、馬總統は憲法に従って、「台湾を主体とした、人民に有利になる」を原則とした施政を行っており、蔡前主席の指摘は当たらないと交わすとともに、「馬總統は与野党首脳会談の開催を望んでいる」と民進党に対話を呼びかけた。<sup>2</sup>国民党は殷瑋報道官が、「蔡前主席の公開書簡は、表面上は馬總統への批判であるが、実際には民進党内の権力闘争の延長であり、これらの発言は蘇元院長との政治的駆け引きの意味合いではないか」とその発言の動機に疑義を呈した。<sup>3</sup>

5月18日、『聯合報』が馬總統の満足度に関する世論調査の結果を公表した。<sup>4</sup>表1が示すように、馬總統に対する満足度は2008年5月の調査以降最低の23%を記録し、不満足も66%に達した。また将来の展望についても、回答者の56%が「馬總統が引き続き台湾を率いていくことに自信がない」と回答するなど、同紙は馬總統が空前の執政危機に直面していると指摘した。右結果に対し、總統府報道官は「馬總統はあらゆる世論調査の結果に対して注意を払い、参考にしており、必ず民衆の声と不満には謙虚に耳を傾ける」とのコメントを出した。

『聯合報』という国民党寄りの新聞の世論調査ですら馬總統の施政に対し厳しい結果が出たことで、当日夜の複数のテレビ局の政治討論番組が「あの『聯合報』ですら、馬の執政危機を率直に指摘した」等の発言が多々聞かれた。

馬總統の二期目の總統就任日前日に、民進党の主導による大規模な抗議デモ活動が台北市内で行われた。<sup>5</sup>民進党報道官は15万人がデモに参加し

表1 馬總統の満足度の変化の変遷

調査年月	満足	不満
2008年5月20日 總統就任	66%	10%
2009年5月18日 總統就任1年	52%	33%
2009年8月18日 八八水害直後	29%	54%
2010年5月17日 總統就任2年	39%	43%
2011年5月18日 總統就任3年	45%	41%
2012年5月17日 總統就任4年	23%	66%

参考資料：「聯合報民調 520 前夕馬聲望新低 23%」『聯合報』（2012年5月18日）頁1。

たと発表した。<sup>6</sup>抗議者の主張は「日子歹過、總統踹共」であったが、筆者が同デモを目撃した際には「政府無能」、「馬英九下台！（辞任しろ）」といったスローガンが目撃できた。

抗議活動は、19日午後4時から台北市内の3か所から、陳菊代理主席が率いる「生存を必要とするチーム（要生存大隊）」、蔡前主席が率いる「公平を必要とするチーム（要公平大隊）」、姚嘉文前孝試院長ら独立派が率いる「安全を必要とするチーム（要安全大隊）」がそれぞれ市内を行進し、民進党中央党部近くの公園に集合し、夜9時まで抗議集会が行われた。同抗議活動には、他に黄昆輝台湾團結聯盟主席、元行政院長の謝長廷、游錫堃氏などが出席した。陳代理主席は、「總統選挙から4カ月が経つが、この間台湾社会は20数年来経験したことの無い空前の困難に陥っている」との認識を示し、「国民は馬總統を国家指導者として選択したのであるから、台湾住民が直面する苦しみに関して馬總統は責任を負うべきだと」と批判した。<sup>7</sup>

## （2）馬總統による總統就任前日の記者会見

馬總統は總統就任式の前日5月19日の民進党の抗議デモが始まる同時刻の午後4時から急遽記者会見を開催し、最近の世論の政府に対する批判に関して説明した。<sup>8</sup>馬總統は記者会見で自ら、「過去四年間の施政に関して4項目について足りない部分があった」として、「雇用機会」、「平均所得の増加」、「貧富の差の格差縮小」、「政策にかか

る意思疎通と説明不足」を挙げた。これらのうち、「前三項目は、2008年に政権を引き継いだ時代に比べると若干の改善を達成したが、満足のいく数字は残せなかった」との見方を示した。また最近政府が決定したガソリン、電気価格の値上げなどの諸政策に対して、国民が不便さと不安を感じていることに対し、「申し訳ない」と感じており、「国民に対して説明が足りなかった」と感じていると述べた。その一方で、「改革の路は永遠に上り坂であり、歩みにくいものであるが、台湾の未来と前途のために改革を止めることはできない」と強調し、国民に理解を求めた。

總統就任式前日の「謝罪会見」ともいえる、記者会見を開催した意図は、「一期目の反省は今日を最後にけじめをつけ、新たな気持ちで二期目の施政を推進しよう」というものだったかもしれないが、台湾住民にその気持ちが届いたかはわからない。

## 2. 馬總統の就任演説と当日の抗議活動

今回の總統就任式は、馬總統の「経費削減、簡素化」をスローガンとした原則の下に今まで慣例として行なわれた、祝賀式典、国賓を招いての豪華な晩餐会、夜の花火大会などは行なわれなかった。（一部は規模縮小で開催）就任演説は、朝9時から總統府内で催される就任式典の際に行なわれた。

### (1) 総統就任演説

台湾総統の就任演説は、今後4年間の施政方針が含まれるため、大きく注目されるが、今回は馬政権の二期目ということに加え、支持率の低迷もあり、国際社会がその行方を最も注目する兩岸関係においては、大胆な政策を提出する可能性は低いと予測されていた。兩岸関係に関しては、本誌6月号の松本准教授の分析で目新しい内容は示されなかったと指摘されたように、<sup>9</sup>同演説の重点は内政問題に割かれた。

内政に関しては、「経済成長のエネルギーとなる自由化の推進と産業構造革新の強化」、「雇用の創出と、社会正義の実行」、「グリーンエネルギーの環境づくり」、「文化的国力の構築」、「人材の積極的な育成と招聘」の五項目を国家発展のための大きな支柱と位置づけ、台湾の国際的な競争力を全体的に高め、台湾を今後4年間で徹底的に生まれ変わらせ、幸福な社会へ邁進させると強調した。<sup>10</sup>

国家の安全保障に関しては、「兩岸関係の和解による台湾海峡の平和の実現」、「活路外交による国際空間の開拓と国際貢献の増加」、「国防力の強化により外来の脅威を抑止する」の鉄のトライアングル（鉄三角）を以って台湾の安全を護り、バランスある発展を目指すと述べた。2008年の就任演説では直接の言及が無かった日本については、米国、EUとともに特に取り上げられ、「札幌分処の開設、航空路線の増便、文化交流、投資などの領域で重要な成果があり、（断交から）40年間で最も友好的な特別パートナーシップ関係を築いた」と評価した。

同演説については、兩岸関係について「ひとつの中華民国、二つの地区」を強調した点について、政治大学教授で馬政権下で大陸委員会副主任委員を務めた趙建民氏は、「兩岸政策の安定性を際立てるとともに、国内改革と国際空間、兩岸関係に配慮した内容である」と評価した。<sup>11</sup>一方、馬総

統に批判的な李登輝元総統は、「馬は歴史を歪曲している、ひとつの中国を承認したことは自身の矮小化であり、反民主的な、権威主義の復活を主張しており、台湾の主権の流失を招いている」と厳しく批判した。<sup>12</sup>

今回の就任演説は、サプライズも無く妥当な内容であったが、馬総統の低迷する満足度（支持率）を考慮すれば、兩岸関係等で平和協定等のイシューを提出するような余地は全く無く、経済振興を中心とした民生問題を訴えざるを得なかったと言える。

### (2) 総統就任当日の抗議活動

総統就任式の当日、台湾各地は雨模様であったが、台湾各紙は馬政権に対する抗議活動が全島規模で実施されたことを報じた。<sup>13</sup>

野党三党はそれぞれ、馬政権を批判する声明を発表した。民進党は、陳菊代理主席が党幹部を率いて記者会見を開き、「馬総統の演説は4年間の失政に対して謝罪の言葉がなく、誤った政策を推進している陳冲内閣の全面的な改造と民間団体が推進している瘦肉精入り米国産牛肉の輸入開放政策を支持する国民党籍立法委員の罷免活動を支持する」として、馬政権と全面対決する姿勢を強調した。<sup>14</sup>台湾団結聯盟は、抗議デモを実施するとともに馬政権の政策を支持する直轄市長（台北、新北、台中）、国民党籍立法委員及び馬総統本人の罷免を求める連署活動を行う予定があることを表明した。<sup>15</sup>親民党は、表現こそソフトであったが、「馬総統は民意に耳を傾け、国民生活の角度から政策を決定するべきだ」と呼びかけ、必要と感じた時には内閣不信任案、馬総統の罷免案に賛成票を投じることもありうることを強調した。<sup>16</sup>

1月の選挙で再選を果たした馬総統だが、当選から4ヶ月という短期間に支持率、満足度が低下し、与野党間の対立は非常に高まり、今後4年間の政局も2000年以降の厳しい対立が引き続き展



開することは必至の情勢となった。なお一部の野党が主張している、国民党立法委員、直轄市長、総統の罷免案が成功する可能性は現時点では不可能に近いが、感情的な軋轢を有した非理性的な与野党間の対立を和解し、理性的な対話を行える雰囲気醸成は、馬総統の手腕にかかっている。正に「馬総統の施政は謝罪の中で一期目の任期を終え、抗議の中で始まる」試練の幕開けとなった。

### 3. ラクトパミン入り米国産牛肉の輸入開放問題を巡る与野党の攻防

総統就任式後の政局は、立法院の会期が終了する前に国民党が推進する米国産牛肉の輸入開放にかかる法案修正の動きが加速した。5月29日、国民党籍立法委員で右問題を担当している林鴻池党政策会執行長、徐耀昌党団書記長、呉育昇党団主席副書記長らが米台協会（AIT）を訪問し、右問題に関し米側と意見交換をした。林執行長は会談後にマスコミのインタビューを受け、「スタントン AIT 台北事務所処長は、米国産牛肉問題が解決すれば、米台間の TIFA（投資枠組み協定）の交渉を再開することが見込まれ、台湾住民の米国訪問にかかるビザなし渡航に関する進捗も加速するであろう」と説明した。<sup>17</sup>同行した林郁芳立法委員は、「総統就任式に出席した米国の祝賀団の関係者と会見した際にも、スタントン処長と同様の話をしており、今回の発言は米政府の承認を得ているはずである」として同問題の早期解決の重要性を強調した。<sup>18</sup>

報道の翌日には、AIT 台北事務所の報道官が、初めて正式に「牛肉問題は米台貿易と TIFA の唯一の障害である。米国は迅速に TIFA 交渉の再開を望む」と説明した。<sup>19</sup>一方、米側から間接的に批判された民進党は、潘孟安党団幹事長が、「民進党は反米、反米牛でもなく、ラクトパミンの含まれる食肉に反対している」と強調するとともに、

「EU はラクトパミンの含まれない米国産牛肉を輸入しているが、台湾も右に倣えば良い」と従来の立場を示した。<sup>20</sup>6月3日には、ロシアの国際会議に出席していた施顔祥経済部長がロナルド・カーク米通商代表部代表と非公式会談を行い、「牛肉問題を解決後に TIFA の再交渉を促す」との回答を得たと報じられるなど。牛肉問題が米台関係の発展の障害になっているという論調が紙面を賑わすようになった。<sup>21</sup>

6月7日、国民党中央は党団大会を開催し、同党の陳鎮湘立法委員が提案した米国産牛肉の輸入開放にかかる「食品衛生管理法部分条文修正草案」を一致して支持することを採択し、採決時に同草案に理由もなく欠席したり、反対票を投じた場合は罰金のほか、党規違反として処分に課すことを決定した。<sup>22</sup>同大会に出席した馬主席は、「今法案に賛成票を投じることは、馬英九や国民党を支持するだけでなく、台湾の未来を支持し、台湾を自由で開放された方向へ導くものである」と強調し支持を訴えた。<sup>23</sup>右に対し、民進党は、林俊憲報道官が、「台湾社会は瘦肉精入り牛肉の輸入開放に反対しており、馬総統は未だに台湾人を説得できていない状況下で、輸入開放を強行しようとしている」と批判した。<sup>24</sup>翌8日、蘇主席は党幹部を率いて立法院を訪問し、王金平院長を表敬訪問後、中央党部は、瘦肉精入りの牛肉開放に反対する立場を支持すると強調し、馬総統の姿勢を批判した。<sup>25</sup>

しかしながら、法案採決という決戦を直前に控えた6月9日から11日にかけて中南部襲った豪雨は馬総統の思惑を狂わせることとなった。国民党は当初、12日に関連法案の採決を目指したが、民進党は前日の11日から立法院長が議事進行を行なう「主席台」を占拠し、議場に寝泊りし「主席台」を護る行為に出て議事進行を完全に麻痺させた。国民党内には「夜襲」をかけてでも力づくで主席台を奪回し、開会を強行し法案の審議と採

決を実行しようという「主戦論」もあったが、11-12日にかけて中南部の多くの県市が豪雨のため学校は休校、役所も休所になったことで、中央政府は災害復旧を優先せざるをえなくなり、与野党の協議も不調に終わったことで、政府高官からは、「立法化ができない間は、先に行政命令による米牛肉開放の実施の可能性も排除すべきではない」との意見も出されるようになった。<sup>26</sup>かかる状況の中で13日、民進党中央は党報道官が「災害復旧を超党派で行なうために立法院は直ぐに休会すべきである」との呼びかけを行なったが、国民党の拒絶に遭った。<sup>27</sup>一方、国民党は民進党に対し、「民進党こそ、立法委員は自身の選挙区に戻り復旧の手助けをすべきなのに、非理性的な手段で立法院の議事進行を麻痺させ、対立を作り出している」として、会議ボイコットの態度を止めるよう呼びかけるなど、<sup>28</sup>無益な言い争いが続いた。

結局、会期最後の週は、民進党が「主席台」を占拠した形での対峙が続き、その間も議会再開のため与野党間で10回以上に協議、交渉が続けられたが、結論はなく15日に休会となった。

『自由時報』紙は、会期中に馬総統が最優先で取り組んだ米牛肉問題を解決できなかったことで、党内関係者の発言「馬のレイムダックの兆候が浮かび上がった」を引用し、馬の党内の指導力に翳りが見え始めたと論評した。<sup>29</sup>『中国時報』紙は、民進党は今回の「焦土作戦」は、短期的には勝利したかもしれないが、他の重要な法案はほとんど審議されなかったことで、台湾社会の信頼を得られたかどうかは疑わしいと論じた。<sup>30</sup>

休会後の臨時会開催の戦略を模索するため、馬総統は17日に総統府、行政院、党幹部によるハイレベル会議を開催し、「理性的な態度で米牛肉の開放問題に向き合おう」と呼びかけるとともに、右修正法案が可決するまでは、行政命令による米牛肉の開放措置は採らないと言明し、あくまで立法化を推進する姿勢を強調した。<sup>31</sup>しかしなが

ら、またしても「天が野党に見方をした」形となった。19-20日には再び台風が台湾を襲い、中南部を中心に学校休校、役所休所となり、臨時会開催にかかる与野党交渉を実施する雰囲気は全く無くなり、最終的には26日に開催された与野党協議で、7月24日に審議内容につき協議する「談話会」を開催、翌25日から3日間を臨時会の開催日とすることに決定した。<sup>32</sup>しかし、米牛肉開放の修正法案に関する与野党の対立は解けておらず、後述する政府高官の収賄事件の影響もあり、臨時会でスムーズに審議、採決に持ち込めるかは不透明である。

#### 4. 行政院秘書長の収賄事件

6月28日、台湾各紙は政治から芸能ニュースまで幅広く報じる写真週刊誌「壹週刊」の記事を引用し、林益世行政院秘書長<sup>33</sup>が立法委員時代の2010年に大手国営企業の中国鋼鉄の子会社との契約締結の口利き(関説)をした見返りに業者(「地勇公司」経営者の陳啓祥)から、6300万元を獲得した上、今年の2月25日に新たな契約を結ぶべく、林秘書長は自ら陳啓祥に対して、再契約のため8300万元を用意するよう要求したと報じた。<sup>34</sup>陳啓祥によると、今回のビジネスは多額の賄賂を渡してまで契約するほどの利益が見込めないことから、賄賂の支払いを拒んだところ、林氏にビジネスを妨害され、自身の会社が倒産の危機に瀕するようになったことで暴露したと報じられた。林秘書長は右報道後、陳行政院長、馬総統に報告した上で、記者会見を開き、『壹週刊』の報道は事実ではない、クリーンであることは自分が最も重視することであると強調し、右雑誌を告訴する予定であると表明した。<sup>35</sup>また馬総統は、林秘書長に対し、「クリーンであることは公務員の最も基本的な道德標準であり、グレーゾーンは許されない」として、世論にしっかり説明するよう促した。

林秘書長は、元省議会議員の父を持つ政治家族の出身で、「本省人」、「南部」、「若さ」（1968年生まれ）という国民党が必要な特質を有していたことから、早くから党内で次世代を代表する人物として大切に育成されてきた。30歳という若さで旧高雄県選挙区から立法委員に当選後、同委員を4期務めたほか、馬総統が党主席時代の2006年4月から2008年1月まで党副主席に抜擢されたほか、その後も党青年団総団長、政策委員会執行長などの要職を歴任し、「馬の側近」とは言えないまでも馬総統が重用してきた人物の一人である。

民進党は右報道を受けて、林報道官が検察に対して「迅速な調査を実施し、馬総統も政治と道徳上の責任を負うべきである」と指摘した。<sup>36</sup>

翌28日、新聞各紙が林秘書長と陳啓祥が会っている写真を掲載後、林秘書長は再度記者会見を開き、「陳啓祥とは過去に会ったことはあるが、賄賂は受け取っていない」と強調し、週刊誌と陳啓祥を告訴すると表明した。<sup>37</sup>しかしながら、総統府、行政院は林秘書長と距離を置き、静観するようになったことで、秘書長辞任は免れないとの見方が大勢を占めるようになった。<sup>38</sup>

29日には、民進党の趙天麟立法委員が、「林秘書長と陳啓祥が賄賂の金額について相談している録音媒体を入手し、自身も聞いたところ、8300万円を要求する内容が確認できた」と公表した。<sup>39</sup>追い詰められた形となった林秘書長は、同日、事態の混乱の責任を取り秘書長を辞任したが、「今回の事件は自分への政治的な抹殺工作である」とし、民進党側に対して、「自身の収賄を裏付けるような証拠があるのなら、証拠を特捜部に渡すべきだ」と強弁し、その夜放映のテレビ政治討論番組に電話をかけ弁明し、視聴者に潔白を訴えた。<sup>40</sup>

翌30日、検察特捜チームは、林秘書長の収賄を暴露した陳啓祥を勾引し、事情聴取を行った。その際、陳啓祥は林氏と収賄の相談をしている内容が録音された媒体を提出した結果、特捜チームは

陳啓祥を収賄容疑の被告として、身柄を拘束した。<sup>41</sup>7月1日には、検察特捜チームは、ついに林前秘書長を被告とて召喚、事情聴取を行い、同人の台北の自宅と高雄の実家及び関連企業を搜索した。<sup>42</sup>1日午後4時から約12時間にわたり、聴取を受けた林前秘書長は、検察側が突きつけた証拠資料の前に自身の収賄を認め、逮捕された。<sup>43</sup>

林前秘書長の逮捕を受けて、馬総統は「大変遺憾で申し訳ない、執政チームは今事件を教訓として、公職者の任用については慎重であるべきだ」と語った。<sup>44</sup>国民党寄り論調の『聯合報』は、林前秘書長は馬総統自身が抜擢した人物であるところ、今回の事件で馬総統の威信に傷がついたのは明白であり、政務全体の推進に不利になるところ、秘書長の後任人事も含め行政院の人事任用の権力を行政院長に渡すべきだと主張した。<sup>45</sup>また国民党の蔡正元立法委員は、「馬総統が重用する人物は『若手』、『学者』に偏る傾向があるが、人材登用は慎重になるべき」と指摘した。同じく同党の陳学聖立法委員は、「今回の事件は国民党の南部の選挙に大きな打撃であり、2014年の地方選挙、甚だしくは2016年の総統選挙にまでダメージを与えかねない事態だ」と警笛を鳴らした。<sup>46</sup>

民進党は馬総統の発言に対し、林報道官が「林前秘書長は陳啓祥に対して『必要経費』として金銭を要求していたが、今回の事件の背後には共犯構造があるのではないか?」、「馬政権の中に他に何人の林益世がいるのか?」と疑義を呈し、馬総統は「公に謝罪し、政治道徳的な責任を負うべきである」と指摘した。<sup>47</sup>また同党の王報道官は、馬総統の「遺憾である」との発言は、「あたかも評論家と同じような他人事のような発言であり、執政チームの汚職問題に対して徹底的に調査を命じる姿勢を見せるべきだ」と批判した。<sup>48</sup>

林氏の逮捕に対し国民党は、3日午後1時に考核紀律委員会を開催し、林前秘書長の収賄事案につき議論した結果、「林同志は長期にわたり党が育成

表2 馬總統のパフォーマンスに対する満足度調査

	満足	不満	意見なし
20111227 (選挙半月前)	40	45	15
20120209 (陳冲内閣)	40	37	23
20120313 (米国牛肉)	28	50	22
20120419 (アフリカ訪問)	22	61	17
20120515 (総統二期目就任)	20	64	16
20120703 (林益世汚職)	15	69	16

資料元：「林益世事件後馬總統滿意度民調」『TVBS』（2012年7月3日）

[http://www1.tvbs.com.tw/FILE\\_DB/PCH/201207/39g77tofel.pdf](http://www1.tvbs.com.tw/FILE_DB/PCH/201207/39g77tofel.pdf)

し、要職に就く身でありながら、大きな過ちを犯し、党の名誉を傷つけたことにより、党の規定に従い除籍処分に付すことを決定した」と表明した。<sup>49</sup>また4日の中央常務委員会で、馬主席は、「今事件に関係する人数、範囲、レベルが如何なるものであっても徹底的に捜査を行う事を要求する」とともに、「国民党はあらゆる力を用いて、清廉の価値を護る」と強調した。<sup>50</sup>

こうした中、『TVBS』テレビが林前秘書長の逮捕直後（7月2-3日）に実施した馬總統に対する満足度調査では、台湾住民の馬總統に対する「率直」な反応が示された。馬總統のパフォーマンスに対する「満足」は、5月の調査より、5ポイント下落し15%に、「不満」も5ポイント上昇し69%となり、ともに過去最低を記録し、馬政権のクリーンというイメージは大きなダメージを受けたと分析した。<sup>51</sup>

民進党は4日、中央常務委員会を開催し、政局の安定、国民の信頼回復のために、現政府は以下の事項に取り組むべき問題として①総統は今事件に対し他人事のような態度をとるべきでなく、正式に全国民に謝罪すべきである。②憲政体制を尊重し、全面的内閣の改造を行い、国民の信頼を回復させよ。③汚職事件は徹底的に調査し、国民に責任ある説明をすべきである。④国営事業は全面的な整理整頓を断行し、構造的問題を除去すべきである。⑤国民党の党資産はゼロに帰し、黒金体質に別れを告げ、民主政治に回帰すべきであるの

五項目を挙げた。<sup>52</sup>馬總統の満足度が低迷することに対し、蘇主席はマスコミから質問を受けた際に、「最近の政局の混乱と国民の生活の苦しみ、さらには政府高官の収賄事件を考えれば、馬總統の満足度が最低を記録したのも意外ではない」と指摘した。<sup>53</sup>

政府は今回のスキャンダル後の事後対応処置として、法務部廉政署が7月7日に「清廉（廉政）座談会」を開催し、馬總統、呉副總統、陳行政院長のほか各部門の首長及び幹部が出席し、引き締めを図った。馬總統は同座談会の挨拶で「林前秘書長の事件は大変心が痛むものであり、政府の汚職防止及び汚職追放のメカニズムを再検討し、国民の信頼を取り戻さなければならない」と強調した。<sup>54</sup>

林秘書長の汚職事件は、支持率が低迷する馬政権にとって、米牛肉問題で議会の審議が膠着したプロセスの中で、降って湧いた災難に等しく、政権運営はより厳しくなった。また、馬總統自身が抜擢した人物の汚職は、馬自身の人事上の責任だけでなく馬自身のクリーンなイメージが大きく傷つき、党内の影響力も急激に弱まる可能性があり、主席辞任の声が党内で公に高まるようになれば、予想以上に早い段階で馬がレームダック化することも現実性を帯びてくるようになるかもしれない。

## 5. 民進党主席選挙は蘇貞昌氏が勝利

### (1) 候補者によるテレビ討論会

4月中旬の候補者の登記から5月27日の党员直接選挙までの間、高雄、台中、台北の三都市で候補者によるテレビ討論会が実施された。4月29日の第一回討論会は高雄市で開催された。候補の5名（蘇貞昌元行政院長、許信良元主席、蔡同榮前立法委員、蘇煥智前台南県長、吳榮義元行政院副院長）はそれぞれ自身の得意とする分野で主張を展開したが、5人とも一致した点は、「2014年の地方選挙（直轄市を含む県市長、县市議選挙）に勝利してこそ、将来政権を奪回するための基礎を固めることができる」との主張であった。<sup>55</sup>今選挙は世論調査でトップを走る蘇貞昌氏と他候補4名の論争が如何にして展開されるかに関心もたれたが、第一回目の討論会では「反蘇貞昌包圍網」は形成されず、各候補者から目新しい主張も見られず、筆者を含む激しい論戦に期待した者にとっては退屈な、静かな討論会であった。<sup>56</sup>

5月6日に台中で開催された第二回目の討論会では、有力候補の蘇元院長が他の4人の候補から集中攻撃を受ける一幕があった。特に許元主席は、「蘇元院長は兩岸政策に関して意義と価値のある発言がないが、兩岸関係への理解が乏しいか、批判を受けるのを恐れているのではないか」と指摘した。また蔡前委員は、「蘇元院長はしばしば党内の団結を主張しているが、自身は2010年の直轄市長選挙で党内の調整が整う前に台北市長選

への出馬を表明し、党内を混乱させた」と批判するなど蘇元院長に対する攻撃が目立った。<sup>57</sup>

5月13日に台北市で開催された第三回討論会は、再び許元主席が蘇元院長を厳しく批判し、4人の候補による蘇元主席に対する集中攻撃が再現されたが、蘇氏は終始党内の団結を呼びかける姿勢を堅持した。<sup>58</sup>また、許元主席が、2016年の総統選挙への出馬への意向に関して蘇元院長の意向を追及した。許元主席を含む他の4候補には総統選出馬の意思はないと明言し、蔡英文への支持を暗示したのに対し、一方で蘇元院長は、「2016年の総統選挙の事ばかり議論するのは、有権者に対して失礼である。党主席の任期は2年であり、まずは2014年の地方選挙で勝利してこそ、2016年の選挙を語る事ができる」と最後まで自身の動向については明言しなかった。<sup>59</sup>

### (2) 主席選挙の結果

5月27日に投開票が行われた党主席選挙は蘇元院長が、過半数を超える得票率で圧勝した。<sup>60</sup>2位には最も若く、将来性のある蘇煥智が入った。一方選挙戦序盤から、次期総統選挙の候補として蔡英文を推し、蘇貞昌批判を展開した許信良元主席は得票率2%台の最下位に終わった。蘇嘉全秘書長は、同選挙を総括し、「今回の選挙の投票率は68.62%にも達し党员の党の発展に対する関心の高さが示された」と評価した。<sup>61</sup>選挙に勝利した蘇元院長は、「この歴史的な時に民進党は党創設時の古参党员に党主席のポストを与えた

表3 民進党主席選挙の結果

選挙人番号	候補者	得票数	得票率
1	蔡同榮	12,497	11.28%
2	蘇煥智	23,281	21.02%
3	許信良	2,763	2.49%
4	吳榮義	16,315	14.73%
5	蘇貞昌	55,894	50.47%

資料元：民主進歩党ホームページ「民主進歩党第十四屆黨主席選舉結果新聞稿」（2012年5月27日）[http://www.dpp.org.tw/news\\_content.php?sn=6132](http://www.dpp.org.tw/news_content.php?sn=6132)

が、自分は重大な責任を深く感じており、自分は党主席の職務を全力で全うする」として、改めて党内の団結を求めた。<sup>62</sup>

今選挙では、党主席選挙とともに各県市の主任委員選挙も同時に実施され、「蔡英文系」の候補が二大都市の台北市と新北市で勝利し、蔡英文が蘇主席をけん制する情勢となったとの分析も見られた。<sup>63</sup>また、蘇主席が掲げた「党内団結」は、民進党にとって古くて新しい永遠の課題であるが、蘇主席を支持する党内有力派閥の新潮流派が、蔡英文やその他の有力者に党内の権力を分かち合うか否かが党内団結の鍵であるとの分析も見られた。<sup>64</sup>

馬総統が支持率の低迷にあえぐ中、民進党は2014年の地方選挙、16年の国政選挙での勝利を見据えた戦略を練ることになるが、党内改革、中国政策路線など課題は山積みであり、蘇貞昌が如何に党内事務を取り仕切り、変化を期待する台湾の有権者に応えられるかは注目すべきであろう。

## 6. 日台要人の往来関連

### (1) 馬総統と日本国会議員の会見

5月8日、馬総統は「八田與一技師逝去70周年追悼記念会」に出席するため訪台した藤井孝男日華議員懇談会幹事長ら一行と会見した。<sup>65</sup>馬総統は、「日本の台湾統治時代の評価については、様々な見方があるが、八田氏の台湾に対する貢献は誰もが認めるところであり、自分は総統就任後、八田與一記念公園の建設を積極的に推進した」と述べた。また、馬総統は、「日華議員懇談会が日台関係を増進するのに重要な役割を果たしてきた」と賞賛するとともに、賓客の皆様にも引き続き新任の沈斯淳駐日代表を支援していただきたい」と述べるとともに、「沈代表と廖了以亜東関係協会会長の協力の下に日台関係が発展することを信じている」と述べているところがあった。

### (2) 馬総統と平沼赳夫日華議員懇談会会長の会見

5月20日、馬総統は、総統就任式に出席するために訪台した平沼赳夫日華懇会長ら21名の衆参両議員と会見した。<sup>66</sup>馬総統は平沼会長らに訪台の歓迎の意を表明するとともに、日台関係は平沼会長ら同会メンバーの努力の下に幅広い協力関係が推進され、多方面で重要な進展があり、断交から40年目にして最も良い「日台特別パートナーシップ」になったと評価し、特に「海外美術品等公開促進法」が日本の国会で制定されたことは日台文化交流が更に前進するものとなったと評価した。

### (3) 王金平立法院長らの東北訪問

王金平立法院長を団長とする訪日団は7月1日から7日までの間、日本を訪問し、東京のほか、東北大震災の被災地である宮城、福島両県を視察した。全日程を終えた一行は、6日に東京で記者会見を開催し、王院長は今回の訪日の主な目的は、「東北大震災の被災地の復興状況の視察」、「日本の政党、行政、立法界との交流」、「日本各界との協力を通じた日台産業協力の強化」の三点であったと述べた。<sup>67</sup>

王院長は被災地の視察では、「台湾からの義捐金が適切に使われていることが確認されたと述べた。日本各界との交流では、衛藤衆議院副議長、尾辻参議院副議長、谷垣自民党総裁、前原民主党政策調査会長をそれぞれ表敬訪問したと説明した。日台産業協力に関しては、中台がECFAを締結した後、日台双方は右枠組みを利用して共に中国へ進出することができるとの期待を述べた。

## 7. 台北駐日経済文化代表処代表の離着任

5月29日、馮寄台駐日代表は、3年8ヶ月の勤務を終え帰国の途に着いた。空港では、日本在住の台湾メディアのインタビューに応じ、「外交官

の生涯において、日本滞在中が最も充実したすばらしい時期であった。帰国後は一人の親日派、知日派として貢献していきたい」と述べた。<sup>68</sup>

翌30日、沈斯淳駐日代表が着任した。空港では、駐日代表処職員、今井正交流協会理事長、華僑関係者などの出迎えを受けた他、メディアの質問に対し、「良好な日台関係を引き続き進展させたい」と抱負を語った。<sup>69</sup>6月1日、沈代表は交流協会本部を訪問し、大橋光夫会長、今井正理事長らに新任の挨拶を行った。<sup>70</sup>沈代表は、抱負として「台日関係の発展のために尽力していきたい」と述べた。また大橋会長は、「昨年会長に就任後、3回訪台したが、その際沈代表とは毎回お会いしており、古い友人の歓迎である」と述べ歓迎の意を表明した。

## 8. 交流協会台北事務所新旧代表の離任、着任レセプション

5月10日、交流協会台北事務所は、今井前代表の離任及び樽井澄夫新代表の着任レセプションを台北市内のホテルで開催した。<sup>71</sup>樽井新代表は挨拶で「台湾のことは非常に好きであり、台北事務所代表という仕事に、大きな責任を感じているが、日台関係を全力で発展させていく所存である」と述べた。すでに、日本へ帰国し交流協会理事長に就任した今井前代表は事情により欠席となったが、挨拶文が代読された。

同レセプションには、台湾からは連戦元副総統、許水徳元考試院長、姚嘉文元考試院長、廖了以亜東関係協会秘書長らが出席した。

## 9. 樽井交流協会台北事務所代表の総統、副総統との会見

### (1) 馬総統との会見

樽井代表は5月16日に馬総統と会見した。<sup>72</sup>馬総統は樽井代表の台湾着任に対し歓迎の意を表するとともに、「『日台特別パートナーシップ』は、

引き続き安定した発展をしており、自分が総統就任後、日台双方は『ワーキングホリデー』、『日台投資協議』など実務面での交流にかかる覚書に調印したが、これらの日台関係の進展はこの40年間見られなかった現象であり、日台関係にとって非常に有益なものになっている」と指摘した。

また馬総統から、「台湾の新駐日代表の沈代表がまもなく着任するが、将来、樽井代表と沈代表が協力して、日台間の更なる経済交流を切り開くことを期待する」と述べるところがあった。

### (2) 蕭萬長副総統との会見

樽井代表は、5月17日に蕭萬長副総統と会見した。<sup>73</sup>蕭副総統は、「近年、日本、台湾及び国際社会の環境は大きな変化を遂げており、そのような環境の中で緊密な日台関係の結びつきを、いかにして引き続き促進していくかを、日台双方は慎重に考察する必要がある」と指摘した。また、「日台双方が引き続き交流を深め、産官学界の協力を推進していくことは、日台両国民にとって有益であるところ、双方が更に交流を強化することを期待する」と述べられた。

## 10. 2011年度台湾における世論調査

6月22日、交流協会台北事務所は「2011年度台湾における対日意識調査」の結果を公表した。同調査は、2008年、2009年にも実施され今回が三回目の調査となった。<sup>74</sup>詳細な調査結果は交流協会のホームページに譲り、要点を紹介すると、「一番好きな国・地域」の設問では日本は41%を占め1位の座を守ったが、前回調査と比べると12ポイントダウンした。とはいえ、2位の中国大陸及び米国の8%を大きく引き離し独走状態の1位となっている。「今後親しくすべき国・地域」の設問では、前回同様、中国が37%と1位の座を死守し、日本は2位(29%)につけたが、前回との差は2ポイントから8ポイントに広がった。「親しみ度」

に関しては、広義の「親しみを感ずるが」72%を占め「親しみを感ずらない」の13%を大きく上回った。「日台関係の現状」については、「良い」が53%を占め、「どちらともいえない」の45%、「悪い」は僅か2%であった。これらの結果は台湾社会の対日好感度を明白に示す結果となった。

台湾各紙も概ね、調査結果を好意的に報道したが、『中国時報』は、「台湾人が好きな国・地域」は日本であるが、「親しくすべき国・地域」では中国大陸である点を強調して報じたが、この背景に

は、中台間の経済相互依存関係が急速に深まる一方で、依然として武力衝突の可能性も残している中国大陸との関係が台湾人は最も重要であるという冷静な姿勢を示したものとも理解できた。また、アンケートの詳細版で触れられた「日台間における心配な案件」の設問について、「日中関係」と「漁業問題」が3割を超えたのに対し、「尖閣諸島問題」がほとんど台湾人には心配されていないことに対し、意外であったと説明するところがあった。<sup>75</sup>

- 1 「蔡英文痛批馬 籲全面改組內閣」『聯合報』（2012年5月15日）聯4。
- 2 「蔡英文籲改組內閣 府盼朝野會談」『中国時報』（2012年5月15日）聯4。
- 3 中国国民党ホームページ「國民黨：蔡英文矛盾、抹黑 意在權門？」（2012年5月14日）<http://www.kmt.org.tw/hc.aspx?id=32&aid=7073>
- 4 「聯合報民調 520前夕馬聲望新低23%」『聯合報』（2012年5月18日）頁1。
- 5 「日子歹過百姓怒吼 15萬人冒雨嗆馬」『自由時報』（2012年5月20日）頁1。
- 6 警察の推計では、5万5千人としている。
- 7 民主進歩党ホームページ「519遊行晚會，陳菊致詞全文」（2012年5月19日）[http://www.dpp.org.tw/news\\_content.php?sn=6125](http://www.dpp.org.tw/news_content.php?sn=6125)
- 8 總統府ホームページ「總統針對近日相關新聞議題召開記者會」（2012年5月19日）<http://www.president.gov.tw/Default.aspx?tabid=131&itemid=27195&rmid=514>
- 9 松本充豊「ボアオ・アジア・フォーラムの開催と馬英九總統の就任」『交流』（2012年6月号）頁42。
- 10 總統府ホームページ「中華民國第13任總統、副總統宣誓就職典禮」（2012年年05月20日）<http://www.president.gov.tw/Default.aspx?tabid=131&itemid=27200&rmid=514>
- 11 「學者：馬凸顯兩岸政策穩定性」『聯合報』（2012年5月21日）頁2。
- 12 「馬：憲法定位一中威權復辟」『自由時報』（2012年5月21日）頁1。
- 13 「紫怒圍馬 嗆馬踹共」『自由時報』（2012年5月21日）頁5。
- 14 民主進歩党ホームページ「陳菊主席回應馬英九就職談話全文」（2012年5月20日）[http://www.dpp.org.tw/news\\_content.php?sn=6126](http://www.dpp.org.tw/news_content.php?sn=6126)
- 15 台湾團結聯盟ホームページ「台聯發動罷免三部曲 憂心馬第二任推動統一 黃昆輝批馬否定台灣民主化的歷史及事實 回歸黨國架構」（2012年5月20日）[http://www.tsu.org.tw/?post\\_type=news&p=801](http://www.tsu.org.tw/?post_type=news&p=801)
- 16 「馬沒反省道歉在野三黨發動倒閣」『自由時報』（2012年5月21日）頁1。
- 17 「司徒文：美牛開放 TIFA 好談」『中国時報』（2012年5月30日）頁1。
- 18 「司徒文：開放美牛 就重啟 TIFA 談判」『聯合報』（2012年5月30日）頁11。
- 19 「美國：美牛，TIFA 唯一阻礙」『聯合報』（2012年6月1日）頁1。
- 20 「『不反美牛 綠委提歐盟模式』」『聯合報』（2012年6月1日）頁2。
- 21 「美牛表決關鍵時刻 美促 TIFA 復談」『聯合報』（2012年6月4日）頁1。
- 22 中国国民党ホームページ「黨團大會決議一致投票支持『食品衛生管理法部分條文修正草案』」（2012年6月7日）<http://www.kmt.org.tw/hc.aspx?id=32&aid=7139>
- 23 中国国民党「黨團大會馬主席致詞內容」（2012年6月7日）<http://www.kmt.org.tw/hc.aspx?id=32&aid=7140>
- 24 民主進歩党ホームページ「林俊憲：以國民健康為優先，以社會民意為依歸」（2012年6月7日）[http://www.dpp.org.tw/news\\_content.php?&sn=6142](http://www.dpp.org.tw/news_content.php?&sn=6142)
- 25 民主進歩党ホームページ「蘇貞昌拜會立院黨團，勉同志反應民意、為人民健康把關」（2012年6月8日）[http://www.dpp.org.tw/news\\_content.php?&sn=6144](http://www.dpp.org.tw/news_content.php?&sn=6144)
- 26 「藍：不排除行政命令開放美牛」『聯合報』（2012年6月13日）頁11。



- 27 民主進歩党ホームページ「民主進歩黨第十四屆第六十四次中常會新聞稿」(2012年6月13日) [http://www.dpp.org.tw/news\\_content.php?&sn=6150](http://www.dpp.org.tw/news_content.php?&sn=6150)
- 28 中国国民党ホームページ「救災優先國民黨籲綠停止阻擋議事」(2012年6月13日) <http://www.kmt.org.tw/hc.aspx?id=32&aid=7160>
- 29 「美牛案受挫黨內：馬跛腳效應浮現」『自由時報』(2012年6月16日)頁2。
- 30 「綠營短線達陣 卻沒增加信任」『中国時報』(2012年6月16日)頁2。
- 31 「立院臨時會完成修法前 馬：不以行政命令開放美牛」『聯合報』(2012年6月18日)頁6。
- 32 「臨會7/24 啟動 美牛等三案 將攤牌」『自由時報』(2012年6月27日)頁4。
- 33 行政院長の補佐役として、行政院内の事務を統括する幕僚事務的な役職。日本の内閣官房長官に相当。林秘書長は、2012年1月の立法委員選挙で落選後、1月末の陳内閣成立の際に同秘書長に就任していた。
- 34 「林益世被爆索賄 馬促釐清」『聯合報』(2012年6月28日)頁1。
- 35 「林益世：廉潔我最重視」『聯合報』(2012年6月28日)頁1。
- 36 民主進歩党ホームページ「林益世說謊、馬英九包庇，林俊憲：籲特偵組加快偵辦腳步」(2012年6月28日) [http://www.dpp.org.tw/news\\_content.php?&sn=6163](http://www.dpp.org.tw/news_content.php?&sn=6163)
- 37 「七度強調『沒收賄』」『聯合報』(2012年6月29日)頁1。
- 38 「府院畫線防火 林益世孤軍奮戰」『聯合報』(2012年6月29日)頁3。
- 39 「趙天麟：林指示陳付款 說3、3、23」『聯合報』(2012年6月30日)頁3。
- 40 「林益世喊話：讓我一刀畢命」『聯合報』(2012年6月30日)頁1。
- 41 「陳啟祥拘提到案 供詞不利林益世」『聯合報』(2012年7月1日)頁1。
- 42 「收賄案 特偵組南北大搜索」『中国時報』(2012年7月2日)頁1、「林益世到案 列偵字案被告」『自由時報』(2012年5月21日)頁1。
- 43 「承認收賄 林益世收押」『聯合報』(2012年7月3日)頁1。
- 44 「總統：用人可更謹慎小心」『聯合報』(2012年7月3日)頁2。
- 45 「陳揆人事權 馬該放手了」『聯合報』(2012年7月3日)頁2。
- 46 「藍委籲馬：用人圈子要擴大」『聯合報』(2012年7月3日)頁2。
- 47 民主進歩党ホームページ「籲總統徹查並道歉，林俊憲：馬團隊還有多少個林益世？」(2012年7月2日) [http://www.dpp.org.tw/news\\_content.php?&sn=6165](http://www.dpp.org.tw/news_content.php?&sn=6165)
- 48 民主進歩党ホームページ「王閔生：籲馬總統徹查執政團隊，不應卸責」(2012年7月3日) [http://www.dpp.org.tw/news\\_content.php?&sn=6166](http://www.dpp.org.tw/news_content.php?&sn=6166)
- 49 中国国民党ホームページ「考紀會議決議：林益世予以開除黨籍處分」(2012年7月3日) <http://www.kmt.org.tw/hc.aspx?id=32&aid=7205>
- 50 中国国民党ホームページ「馬主席：化危機為轉機 窮盡一切力量捍衛清廉價值」(2012年7月4日) <http://www.kmt.org.tw/hc.aspx?id=32&aid=7210>
- 51 「林益世事件後馬總統滿意度民調」『TVBS』(2012年7月3日) [http://www1.tvbs.com.tw/FILE\\_DB/PCH/201207/39g77tofel.pdf](http://www1.tvbs.com.tw/FILE_DB/PCH/201207/39g77tofel.pdf)
- 52 民主進歩党ホームページ「民主進歩黨第十四屆第六十五次中常會新聞稿」(2012年7月2日) [http://www.dpp.org.tw/news\\_content.php?&sn=6169](http://www.dpp.org.tw/news_content.php?&sn=6169)
- 53 民主進歩党ホームページ「蘇貞昌：鞏固民進黨形象，2014 打出漂亮一仗」(2012年7月4日) [http://www.dpp.org.tw/news\\_content.php?&sn=6170](http://www.dpp.org.tw/news_content.php?&sn=6170)
- 54 總統府ホームページ「總統出席「廉政座談會」」(2012年7月7日) <http://www.president.gov.tw/Default.aspx?tabid=131&itemid=27656&rmid=514>
- 55 「重返執政 蘇貞昌：先贏2014 選舉」『自由時報』(2012年4月30日)頁4。
- 56 「新聞眼／五張老面孔 噴出舊口水」『聯合報』(2012年4月30日)頁2。
- 57 「二辦砲火『四』射延燒到會後」『自由時報』(2012年5月7日)頁5。
- 58 「黨魁之爭 圍剿蘇貞昌 四打一」『聯合報』(2012年5月13日)頁2。
- 59 「還是不表態 選2016？四人進逼蘇脫口：卡蘇打蘇圍毆」『聯合報』(2012年5月13日)頁2。
- 60 民主進歩党ホームページ「民主進歩黨第十四屆黨主席選舉結果新聞稿」(2012年5月27日) [http://www.dpp.org.tw/news\\_content.php?sn=6132](http://www.dpp.org.tw/news_content.php?sn=6132)
- 61 2008年と2010年に蔡英文が当選した時の投票率は51.14%と58%であった。民主進歩党ホームページ「第十二屆黨主席選舉結

- 果新聞稿」(2008年5月18日) [http://www.dpp.org.tw/news\\_content.php?&sn=2655](http://www.dpp.org.tw/news_content.php?&sn=2655)、民主進歩党ホームページ「第十三屆黨主席選舉結果新聞稿」(2010年5月23日) [http://www.dpp.org.tw/news\\_content.php?&sn=4396](http://www.dpp.org.tw/news_content.php?&sn=4396) [http://www.dpp.org.tw/news\\_content.php?&sn=4396](http://www.dpp.org.tw/news_content.php?&sn=4396)
- <sup>62</sup> 民主進歩党ホームページ「蘇貞昌主席就職致詞全文」(2012年5月27日) [http://www.dpp.org.tw/news\\_content.php?&sn=6133](http://www.dpp.org.tw/news_content.php?&sn=6133)
- <sup>63</sup> 「親蔡英文人馬拿下雙北 牽制蘇貞昌」『聯合報』(2012年5月28日) 頁3。
- <sup>64</sup> 「再啟派系共治? 是否團結 視蘇是否分享權力」『聯合報』(2012年5月28日) 頁3。
- <sup>65</sup> 總統府ホームページ「總統接見日本「日華議員懇談會」幹事長藤井孝男參議員一行」(2012年5月8日) <http://www.president.gov.tw/Default.aspx?tabid=131&itemid=27121&rmid=514>
- <sup>66</sup> 總統府ホームページ「總統與日本國會議員慶賀團餐敘」(2012年5月20日) <http://www.president.gov.tw/Default.aspx?tabid=131&itemid=27205&rmid=514>
- <sup>67</sup> 台北駐日經濟文化代表處ホームページ「訪日日程を終えた王金平・立法院長ら一行が記者会見を開催」(2012年7月9日) <http://www.taiwanembassy.org/ct.asp?xItem=293809&ctNode=3522&mp=202>
- <sup>68</sup> 台北駐日經濟文化代表處ホームページ「馮寄台・駐日代表が離任、羽田空港で台日関係者らが見送り」(2012年5月29日) <http://www.roc-taiwan.org/Jp/ct.asp?xItem=283279&ctNode=3522&mp=202&nowPage=1> &page
- <sup>69</sup> 台北駐日經濟文化代表處ホームページ「沈斯淳・駐日代表が着任」(2012年5月30日) <http://www.roc-taiwan.org/Jp/ct.asp?xItem=283279&ctNode=3522&mp=202&nowPage=1&pagesize=30>
- <sup>70</sup> 台北駐日經濟文化代表處ホームページ「沈斯淳・駐日代表が日本「交流協会」を表敬訪問」(2012年6月1日) <http://www.roc-taiwan.org/Jp/ct.asp?xItem=284510&ctNode=3522&mp=202&nowPage=1> &pagesize=30
- <sup>71</sup> 「日駐台代表 樽井澄夫就任」『自由時報』(2012年5月11日) 頁6。
- <sup>72</sup> 總統府ホームページ「總統接見『日本交流協會臺北事務所』新任代表樽井澄夫」(2012年5月16日) <http://www.president.gov.tw/Default.aspx?tabid=131&itemid=27167&rmid=514&sd=2012/05/16&ed=2012/05/22>
- <sup>73</sup> 總統府ホームページ「副總統接見『日本交流協會』臺北事務所新任代表樽井澄夫」(2012年5月17日) <http://www.president.gov.tw/Default.aspx?tabid=131&itemid=27180&rmid=514&sd=2012/05/16&ed=2012/05/18>
- <sup>74</sup> 公益財団法人交流協会ホームページ「2011年度台湾における対日世論調査」(2012年6月22日) [http://www.koryu.or.jp/taipei/ez3\\_contents.nsf/04/29A8A6F6BA532E3349257A2800136FD5/\\$FILE/2011tainichi-yoron-cyousal.pdf](http://www.koryu.or.jp/taipei/ez3_contents.nsf/04/29A8A6F6BA532E3349257A2800136FD5/$FILE/2011tainichi-yoron-cyousal.pdf)
- <sup>75</sup> 「日本研究：台湾人哈日 但認為最該親近中國」『中国時報』(2012年6月16日) 頁4。

## 「正伝後藤新平、第三卷台湾時代」を読む

公益財団法人交流協会専務理事 井上 孝

鶴見祐輔著「正伝後藤新平」（藤原書店刊）、あるいはその第三卷「台湾時代」は既にお読みでしょうか。この後藤新平伝は全8巻・別巻1の膨大なものであり、毎日出版文化賞を得ています。第二巻も「相馬事件」を巡る大活劇などを中心に、血沸き肉躍り大変に面白いのですが、やはり当職にあっては、第三巻を紐解くことが多くなります。

著者の鶴見祐輔は後藤新平の娘婿であり、60年代、70年代の代表的言論人であった鶴見和子、鶴見俊輔両氏の父にあたります。

私はこれまでも本コラムにおいて、台湾の経済発展の基礎は、日本統治時代に台湾内部に豊かに蓄積された農業資本であり、戦後蒋介石政権によって断行された農地改革によってこの豊富な農業資本が産業資本に転化されたことが契機になっていると述べてきました。

後藤新平が台湾総督府民政長官として大活躍した1898年～1906年の間が、台湾経済が日本本土の支援から自立し、農業資本が台湾内部に蓄積され始める時代であったことが、多くのデータをもって紹介されています。現在の台湾経済の興隆を考える上でも、本巻は措くことのできないものであると考える所以です。

後藤新平が民政長官として台湾の殖産興業政策を推進するにあたって、彼に全幅の信頼を置いて支持したのが台湾総督児玉源太郎であり、また部下として支えたのが殖産局長（心得）の新渡戸稲造でありました。

児玉源太郎総督及び後藤新平民政長官（当初は民生局長）が赴任した当時の台湾経済の状況は惨憺たるものであり、米、砂糖、樟脳等の主要農産物の生産力は低く、台湾内部の税収入によっては

台湾経営を賄うことはできず、日本本土からの補助金収入によって財政をどうにか維持している状況でありました。また、乏しい農業余剰もその多くは福建省を中心とした大陸商人、日本統治を嫌って大陸に渡った台湾商人、あるいはその背後にいる西欧商人により台湾外に持ち出され、台湾内部に蓄積されることがない状況が続いていたようです。

この当時、日本政界には、台湾経営はコストがかかりすぎ放棄すべきである、あるいはフランスに売却してしまえなどの意見すら出ていたようです。

このような状況を打開するために、児玉源太郎総督・後藤新平民政長官は、日本の財政規模の約8割にも達する台湾事業公債（当初計画6億円。結果3.5億円）の発行を本国政府・議会に認めさせ、鉄道、港湾、土地調査、給水事業などのインフラ整備に投入、また、樟脳、食塩、煙草の専売制度、さらに、漸禁策の一環としての阿片専売の導入、銀行及び貨幣制度の肅正、大陸に逃亡した台湾商人の帰島の勧奨等の政策の断行により、逐次、米、茶、砂糖、樟脳等の農業生産力を高め、さらに農業余剰の台湾内部での蓄積を実現し、台湾経営の経常経費を台湾内部の税収入によって賄える状態を実現していく状況が生き生きと紹介されています。

李登輝元総統が「今日の台湾は、後藤新平が築いた礎の上にある。」と本書を推薦している所以です。是非ご一読をお勧めします。

なお、申しあげるまでもありませんが、以上はすべて筆者の私見です。

## 編集後記

本年3月30日付けで交流協会経理部へ配属となりました。前職は在ロシア日本国大使館（モスクワ）にて経理を担当しておりました。日本とロシア、互いに地勢学上重要な関係にありますが、日本とロシア間では長年の懸案として北方領土問題があり、最近ではメドベージェフ首相らによる2回目の国後島訪問もあり、ロシアによる実効支配が70年近くにも及ぶこともあり、交渉打開への道のりは年々厳しくなりつつあります。

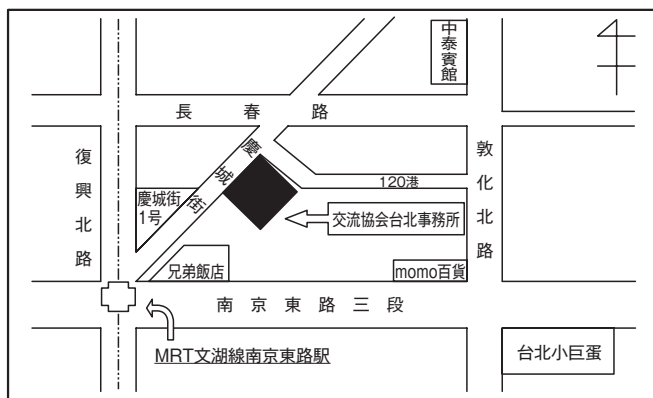
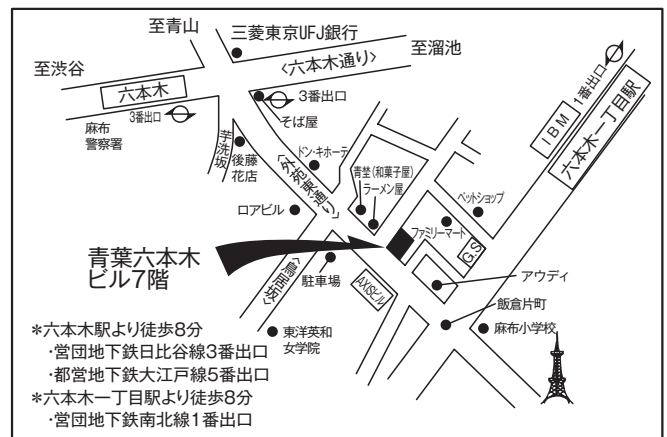
ロシアは1998年のロシア金融危機を底にルーブル切下げによる国内産業の復調と原油価格の高騰を主な原動力として回復し、翌99年以降から10年間連続でプラス成長（2002年を除きすべて5%以上）したこともあり、日露間の貿易高及び進出企業数も増加傾向にあるようです。モスクワに在勤（居住）して感じたことは、朝夕のラッシュ時は言うに及ばず、車の交通量、渋滞が激しく、モスクワ市内全域が駐車場と見まがうほど自動車が氾濫し目的地まで行くのに相当時間がかかることでもあります。特に国内・国際線の飛行場はモスクワ市郊外にあることもあり、出発日など出発時間の4時間以上前にアパートを出発しなければならないほどでした。あれだけの国土の広い国ですから、前地域くまなく整備することは不可能でしょうがモスクワのようなロシアの首都圏ですら道路整備（駐車場含む）等のインフラが交通量の伸びに追いつかないのが現状のようです。小売店やスーパーへの買物に出かけても店員の客に対するサービス（笑顔での言葉かけ）はほとんどなく、その対応は、事務的・機械的であります。ソ連邦崩壊後、20年以上経過しても物流サービスは日本（日本はある意味で特殊かも知れないが）と比べるすべもありませんが、顧客に対しサービス精神が薄いのは彼の国が長年社会主義国家であり、その殻からなかなか脱出出来ない事と関係があるかと思うこともあります。

先般、用務にて初めて台湾を訪問しましたが、時間の制約もあり活気ある台北市街を短時間しか探索できませんでしたが、台湾が日本人にとって旅行地として人気のある理由がわかるような気がしました。台湾の人は一般的に人柄が穏やかであり、外国人特に日本人に対してオープンかつフレンドリーで、ホテル・レストラン等でも結構日本語が通じ、台北では様々な中華料理（台湾、上海、北京等）を気軽に愉しめ、値段も手頃であります。また、島には五つの山脈が南北に走りそれらが島の総面積の半分近くを占め、島の大部分が火山帯であること、日本の自然環境（温泉も点在）にとってもよく似ている等、これらが日本人にとって居心地の良い場所、歴史ある旅先として人気があるような気がします。最後に私事で恐縮でございますが、これから日本と台湾関係の仕事に就くこととなりますが、日台の経済・文化交流等がより一層進展するよう、微力ながら勤めさせていただきますので、宜しく願い申し上げます。

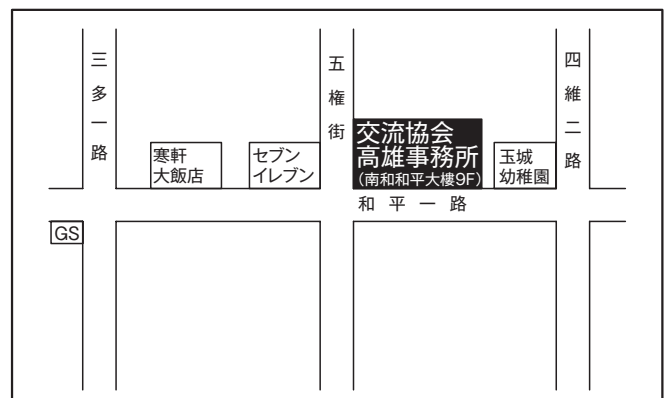
（経理部長 高田 明）

平成24年7月25日 発行  
 編集・発行人 井上 孝  
 発行所 郵便番号 106-0032  
 東京都港区六本木3丁目16番33号  
 青葉六本木ビル7階  
 公益財団法人 交流協会 総務部  
 電話 (03) 5573-2600  
 F A X (03) 5573-2601  
 U R L <http://www.koryu.or.jp>

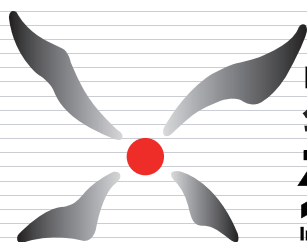
表紙デザイン：株式会社 丸井工文社  
 印刷所：株式会社 丸井工文社



台北事務所 台北市慶城街28號 通泰大樓  
 Tung Tai BLD., 28 Ching Cheng st., Taipei  
 電話 (886) 2-2713-8000  
 F A X (886) 2-2713-8787  
 URL [http://www.koryu.or.jp/taipei/ez3\\_contents.nsf/Top](http://www.koryu.or.jp/taipei/ez3_contents.nsf/Top)



高雄事務所 高雄市苓雅区和平一路87号  
 南和和平大樓9F  
 9F, 87 Hoping 1st. Rd., Lingya Qu, kaohsiung Taiwan  
 電話 (886) 7-771-4008 (代)  
 F A X (886) 2-771-2734  
 URL [http://www.koryu.or.jp/kaohsiung/ez3\\_contents.nsf/Top](http://www.koryu.or.jp/kaohsiung/ez3_contents.nsf/Top)



日本と台湾との架け橋

公益財団法人

**交流協会**

Interchange Association, Japan (IAJ)

